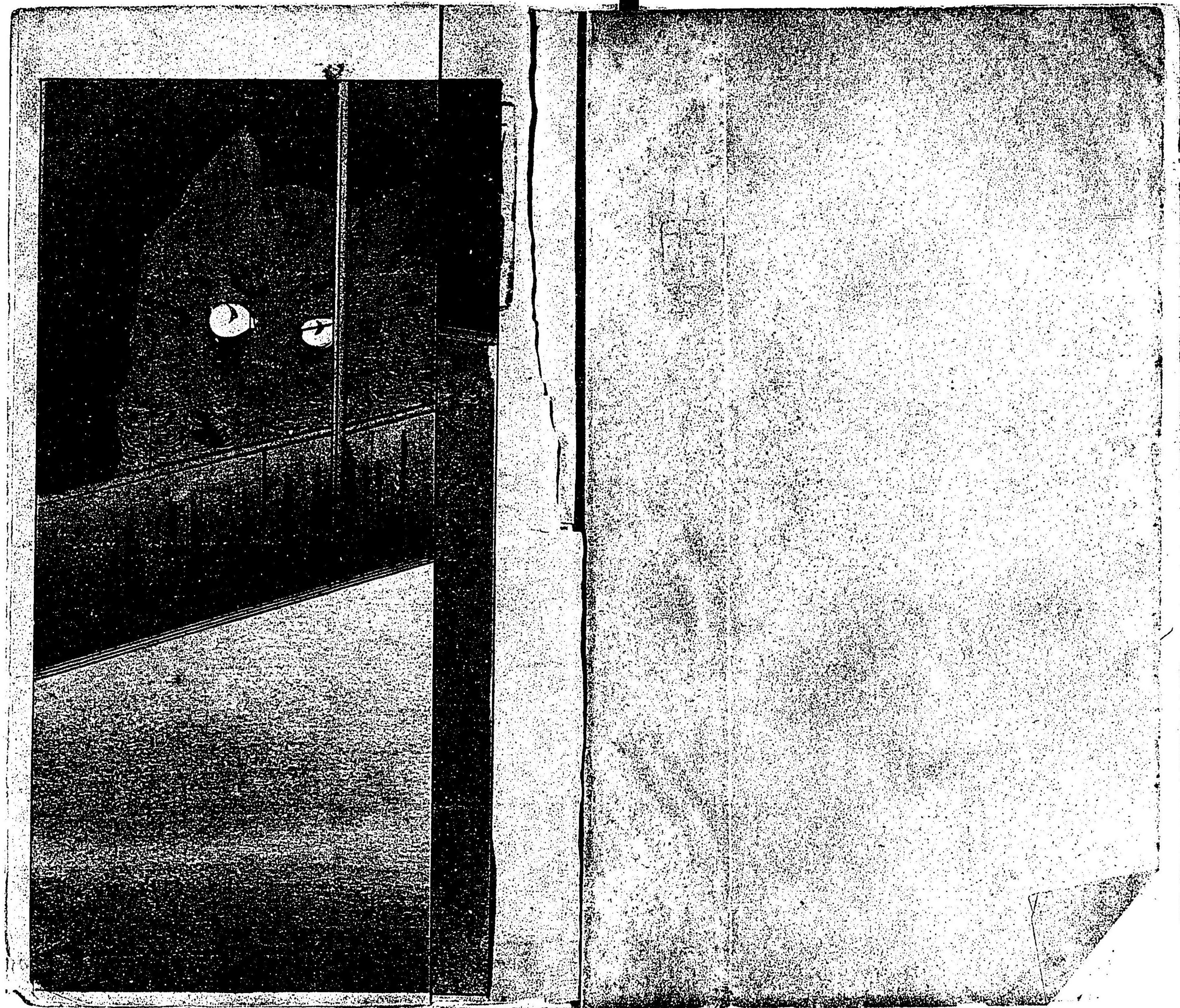


東金  
奇聞

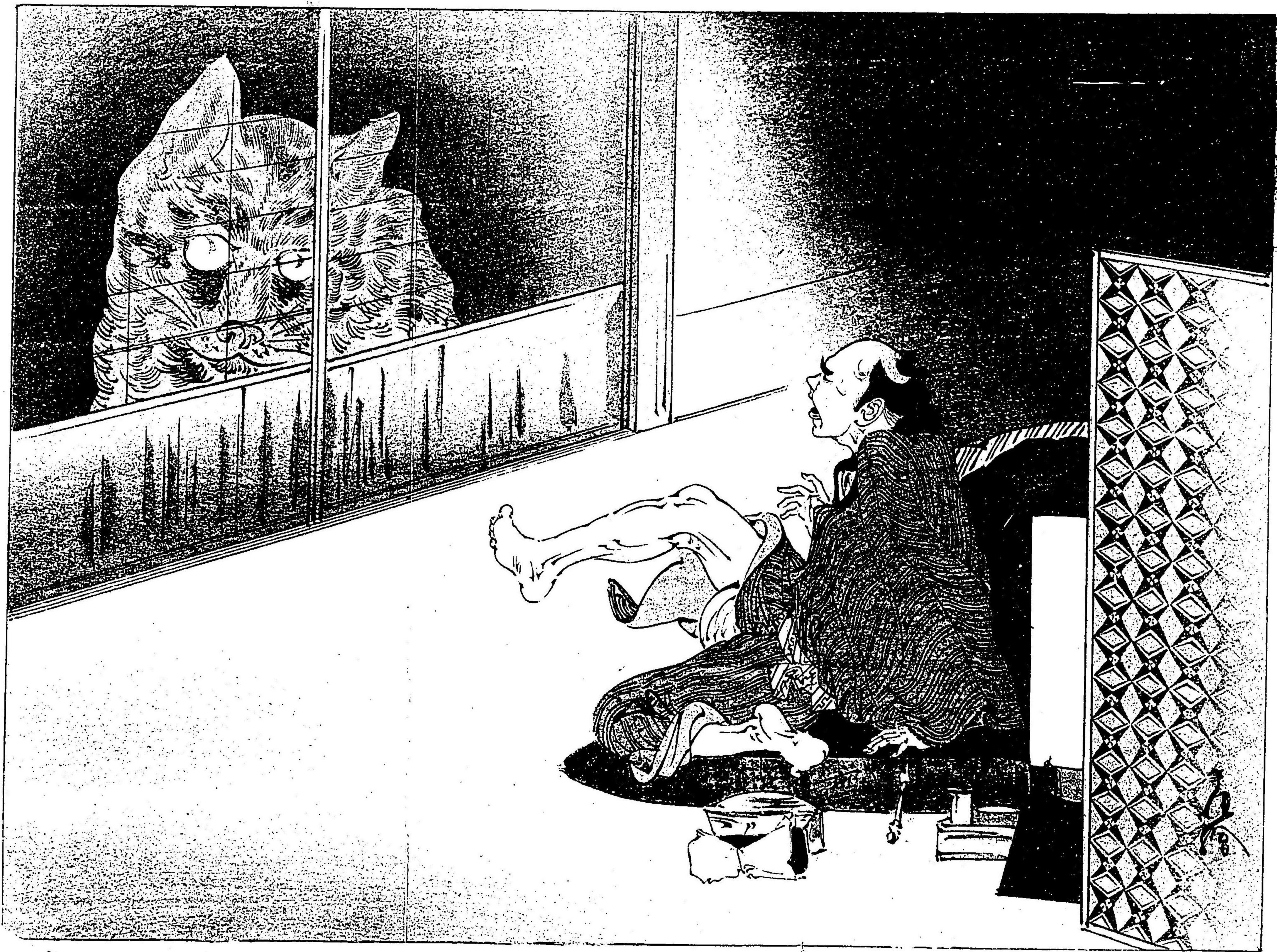
猫塚の由来  
完







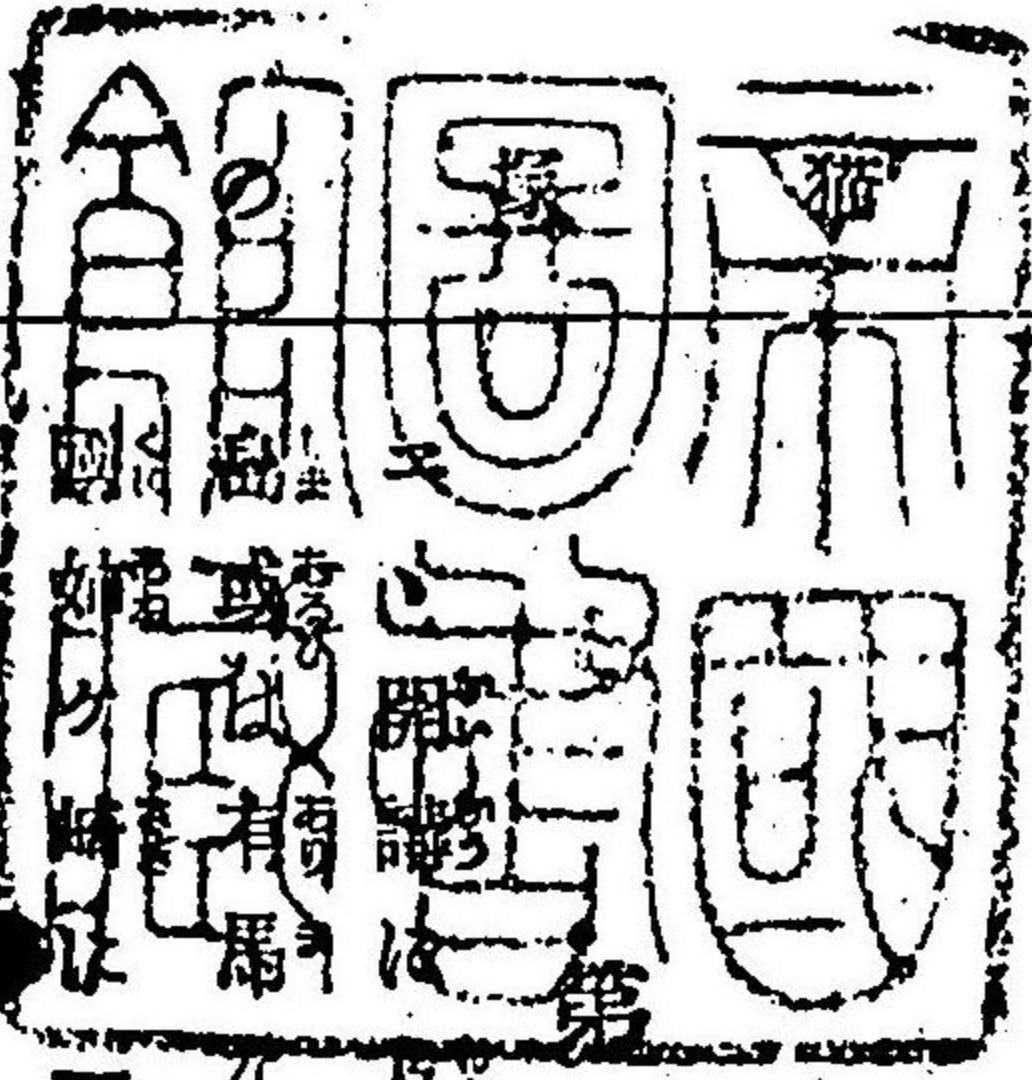






439  
655

1 來 由

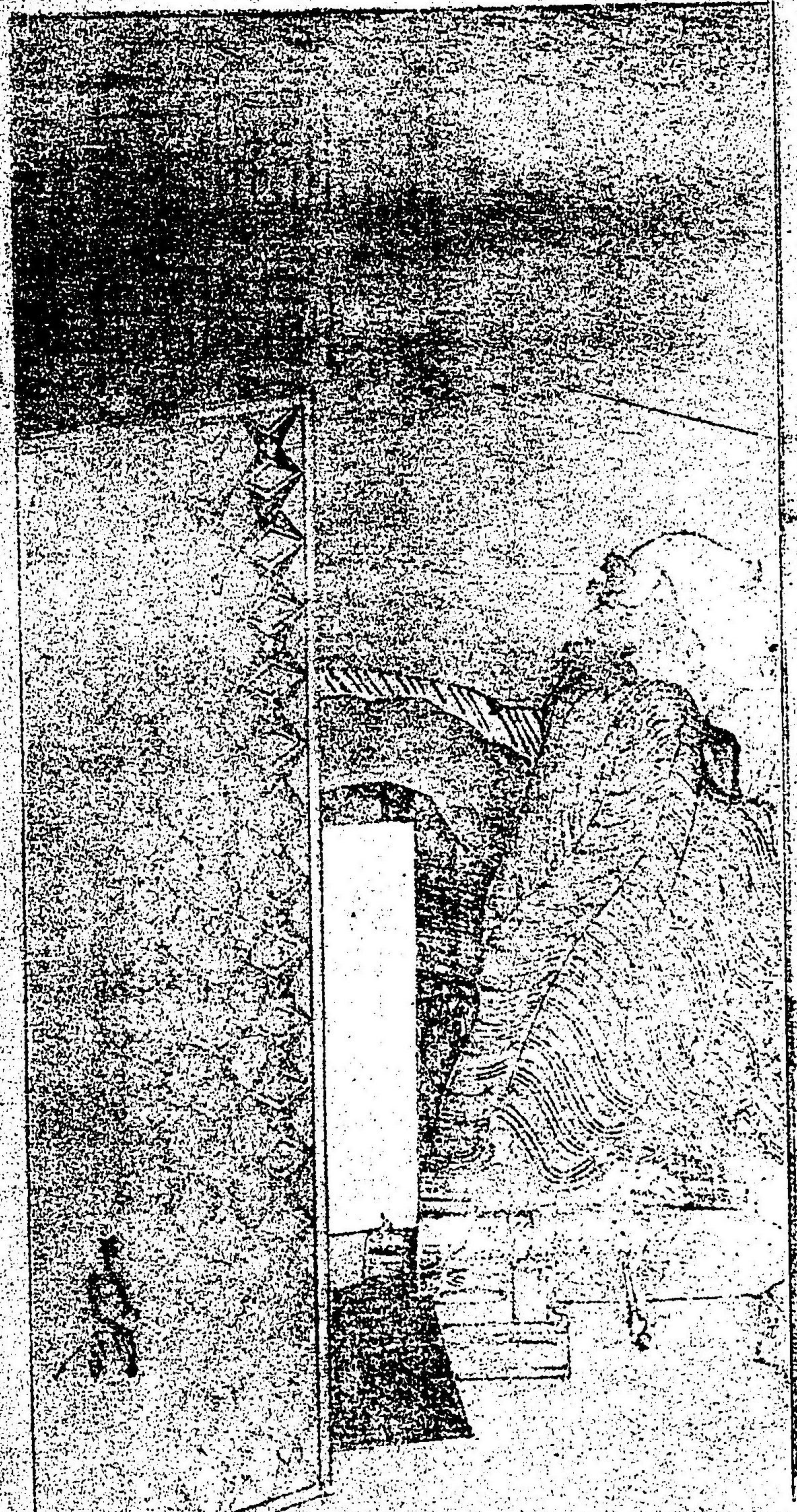


奇聞 東金 猫塚の由來

一 回

西尾魯山講演  
丸山平次郎速記

奇談、お勤めに依り今日より引續き御清聴を煩はします、  
愛に明治八年の頃東京横山町三丁目、小問物問屋を渡世と  
致す、上総屋清左衛門と申す豪家がございまして、當家の悴  
を清三郎と云ひ、至つて物堅き質にて、當年二十二才の春を  
迎へました、未だに一ト晩の登樓をも致したとが無いと云





ふ、明治の今日に在ては稀なる溫柔しき人物でございませぬ、併し親といふ者は妙なもので、溫柔しければをとなしいで、心配を成さるものでございませぬ、頃しも春の三月の事、親父清左衛門は番頭を手許へ招きまして清アノ文助や文へイ清宅の件も最う年頃ではあるし、嫁も娶はねばならぬ時分だよ、それに彼如して座敷の裡に引籠り、書物ばかり讀んで居る、若し癆症と云ふ病ひでも發やア仕まいかと案じられる、マア春先の事だ、チツと櫻花でも見に行くやうに、文助、貴様から悴に云ッては呉れまいか文宜しうございませぬ、格外若旦那様は堅う在らッしやいませぬ、彼れでは躰の爲にも好くございませぬ、一應申上げて見ませう」と番頭の文助は奥室へ参りまして、襖を開け文若旦那様、相變らず御書見でございませぬ、清三オ、文助か、何か用かへ文エい別に用でございませぬ、

ませぬが、貴郎様は餘程親不孝で在らッしやいませぬ、清三コレ文助、言ッて好い事と悪い事がある、親不孝とい容易ならぬ言だ、向ふの糸屋の息子さんの、横丁の伊勢屋の息子さんなどは、随分吉原とやらへ遊びに行ッたり何かして、始終に父さんやお母さんに心配を懸ける事があるさうだ、私に限ッて左様な心配を両親に懸けた事は無い、それに何で私が親不孝だ文エいそれに親不孝でございませぬ、ト申すのは、係り貴郎が御宅にばかり在らッしやいませぬ、外へお出まし成さいませぬから、若し病氣でも發はせぬかと、お父さんやお母さんが大層御心配を成すッて在らッしやいませぬ、シテ見ると矢張り貴郎も親不孝かと私は思ひませぬ、然うぢやございませぬか、清三ム、ウ、何かへ文助、お父さんやれ母さんが、私が係り宅にばかり居るので、御心配なのか文左様でございませぬ、清三



度はなさいまし」と、文助は座敷を出て、是から折詰の用意  
 を致し、深くは召上らぬながら、酒なくて何の己が櫻かな、  
 所謂愛ひの玉簪と、少しばかりの御酒を瓢箪に入れて、お  
 氣に通りの龜吉と云ふ小僧に吩咐け文龜へ「文今見は若  
 旦那様のお供だ、また途中でお氣に障るやうな事を言ッては  
 成らぬぞ、サア早く衣物を着換へて、若旦那様のお履物も其  
 所へ出して置け龜、畏まりました」番頭は萬端の事を吩咐けて  
 奥へ参り文「若旦那様れ支度は如何でございますか、  
 最う其方の手當は好いのかへ文「エ最う御辨當の方  
 うてございます」若旦那は是からお支度をなさる、糸織の羽

それでは私ア如何したら好いんだ文如何すれば好いと云ッて、  
 斯うと云ふ事は申上げられませんが、丁度今頃は向島の櫻花  
 の盛りでございます、昨日は十五日で梅若の祭禮、今日は十  
 六日なりお天氣は好し、貴郎是から花見にでも一寸お出で成  
 すッたら何うでございますか、マア此春先、ゾロ／＼武の上這  
 ひをする時分に、餘りれ宅にばかりお在でなさると毒でござ  
 います、清三「文助、貴様の言ふことは何時でも汚くて困る、武  
 の上這ひと云ふとがあるか文「けれと譬へに申します、清三其様  
 な汚い譬へは言はない方が好からう、それでは私ア花見にで  
 も行けば、お父さんやお母さんが御心配ぢやアないと云ふの  
 か文「左様でございますか、清三「其様なら櫻花を見に行かう文「  
 行ッしやいますか、それはい、それでこそ私の申上げた効の  
 あると申すもの、無ぞ旦那様もお悦びでございますませう、それ



織に琉球紬の一ツ綿入、博多の帯を締め、藤筒の煙草入に、  
 ニツ折の金唐草の紙入に金子を取交せ二十五圓はど入れて之  
 を懐中致し、店頭へ出て参り清三皆者行ッて来るよ皆々「れ早  
 うお歸り遊ばせ」清三郎は龜吉を伴れて、横山町三丁目の宅  
 を出ましたたが、藏前の通りは櫻時分でもあり雑沓を致します  
 から、兩國橋を渡ッて百本杭から一番堀二番堀、駒止石の前か  
 ら多田の薬師へかゝり、吾妻橋を左側に見て、二ツ並んだ枕  
 橋、丁度三圍の土堤へ出て参りますと、何しろ三月の十六日、  
 老若男女打ませて、其雑沓の有様は、中々言語にも申盡せぬ  
 位でございませ、何處で休息うと四邊を見廻しましたたが、  
 丁度長命寺の境内に隙いた處がありまして、其境内の茶店に  
 休んで、持参の辨當を開き、小僧を對手に頻りと櫻花を眺め、  
 或は酒に酔ッて踊り歩く可笑しげな態などを見ながら、心地

好げに例の瓢を傾けて居ります、うちに彼是れ四時少々過  
 ぎたと思ふ時分、清三龜吉龜へイ「清三何時まで居ても際限の無  
 い事だから、最ラソロ／＼歸ると仕やうか」龜「左様、モッ歸り  
 ませう」龜て辨當を取片付け、茶代を拂ッて此處を立出でま  
 したが、竹屋の渡場を渡らうと仕ますと、何分乗合が多くご  
 ざいまして急には渡れず、寧ろ吾妻橋へ廻ッて行かうと、途  
 を轉じて吾妻橋を渡りましたたが、幸ひの事、淺草寺れ觀世音  
 に参詣を仕やうと、雷門を這入ッて龜て禮拜を済まし、左り  
 手に曲り彼の三社様へ参詣をして、今片傍に来ると、嬉し野  
 ど云ふ掛行燈の出た葦張の茶店の前に、年頃は十七八にも  
 成らうと云ふ、眼のバツチリとした、少し斯う垂頬の、脊も  
 高過ぎず中肉な美しい新造が、銘仙の綿入に博多と縞子と並夜  
 になッてゐる帯を締め、縮緬の前掛をして、盆を片手に客を



草臥て居りますから、些時休息で行きませう、お花さん御免なさいまし。はな「サア此方へお掛けなさいまし、貴郎マア今日はお花見でございますか、昨日の梅若様の御祭禮でございます。したが、いつも梅若の涙雨と申して、三滴でも雨の降らぬとはございませんでしたに昨日は好いお天気で、今日も昨日と同じやうに結構な天気でございます、そして向島も大層賑やかだと云ふ事を聞いて居りますが、妾どもは斯うして茶店に居りますから、お花見に参ることも出来ませんが、實に羨ましくございます、併し向島はナンでございますか、モウ櫻花も盛りでございます、清三「サア今日あたりが見どころでせう、大變賑やかでございます、はな「左やうでございます、せうよ、花時分は此邊までも賑やかでございますが、一遍妾もお花見に参り度うございますよ」と言ひながら其うちに茶

送り出して居ました、娘「一服召上りませ、お遣入り遊ばせ、オヤ横山町の小僧さん、龜吉「んマアお遣入り遊ばせ、龜「オヤお花さんですか、はな「ハイ、マアお遣入りなさいまし、今日はお花見でございますか、龜「お花さん、あなたは何ですか、此方へ何時からお歸りになつて居ります、はな「ハイ、先月から阿母が病氣で此方へ歸つて居ります、龜「左様でございますか、道理でお傳さんのお宅へ商ひに行つてもお前さんがお在でなさらないと思つて居りました、清三「龜吉「龜「ハイ、清三「彼のれ方を前識つてるのか、龜「左様でございます、彼女は柳橋の同朋町のた傳さんの所に居りまして、未だ藝妓には出ないんでして、雛妓でございます、清三「然うかへ、それぢやアお前彼のお方と懇意と見ゆるね、龜「左様でございます、清三「それではマア此店で一服して行かうか、龜「然うなさいまし、大分私も



の支度をして、羊羹などの這入ッて居る菓子鉢を出しはな  
アアノ若旦那様、粗茶でございませうが、ね喫り遊しませ  
有難う存じますと、是から清三郎も茶を喫みながら、お花の顔  
をキレイと見て居る、お花もかねて横山助の上総屋の若旦那  
のお美しいお方と云ふ事は、噂には聞いて居りましたが、ね見  
上げ申すのは今日が初めて、ア、好い男だとお花の方も清三  
郎をキレイと見て居る、清三郎も物堅い人だからと申して、  
木竹ではございませう、矢張り美しいのは美しいと感じます  
ア、美しい婦だなと眺めて居ります、是れ所謂る気があれば目  
も口はどに物を言ひと申すは、此處を申したものでございま  
せうか、お互ひに斯うキレイと羨かしさうに顔を覗つめて居  
りました、が、清三郎も何時まで茶を喫んでも居られず、ソ  
コく支度を致し、清三郎さん、此處に茶代を置きます

よ」と半圓ばかり紙に包んで片傍に置き、清三「龜吉、サアモウ  
歸らう、龜「へいお供を致しませう、お花さん左様なら、はあ「マア  
宜しいではございませうか、若旦那様、只今はお茶代を有難  
う存じます、龜吉さん、又此方へ入ッしやッたら寄て下ださ  
いませう、龜「へい又参ります、若旦那様、清三郎は小僧を供に連れ  
其儘横山町のね宅をさして立歸りました、此れお花と云ふ婦  
人を一ト目見たばかりで、それがお話の端緒となり、遂に六  
人の生命を落す、大騒動のお物語りと相成ります、一ト  
息御免を蒙りまして次回に……。

第 二 回

引續きまして申上ます猫塚の由來、併し怪猫のお話しは、怪  
力亂神を語らずと申す語もございまして、可訝い事は餘り申



に無<sup>い</sup>もので、すでに大金を抛<sup>つ</sup>て御當所なごでは南地<sup>か</sup>或<sup>は</sup>北<sup>の</sup>新<sup>地</sup>邊<sup>り</sup>の藝<sup>妓</sup>を落<sup>籍</sup>して、短<sup>狗</sup>一<sup>疋</sup>否<sup>洋</sup>犬<sup>一</sup>疋<sup>下</sup>女<sup>一</sup>忍<sup>ん</sup>で随<sup>分</sup>優<sup>な</sup>色<sup>事</sup>を講<sup>談</sup>師<sup>の</sup>魯<sup>山</sup>が斯<sup>う</sup>云<sup>ふ</sup>悪<sup>口</sup>を申<sup>上</sup>げたら、定<sup>め</sup>し可<sup>憎</sup>奴<sup>ど</sup>いふ思<sup>召</sup>もごさいませうが、これ<sup>れ</sup>の遠<sup>い</sup>國<sup>の</sup>お話しと何<sup>卒</sup>お聞<sup>流</sup>しを願<sup>ひ</sup>ます、餘<sup>事</sup>はさて立<sup>歸</sup>ッてからの續<sup>話</sup>を御<sup>披</sup>露<sup>仕</sup>ります、毎<sup>日</sup>の様<sup>子</sup>に彼<sup>の</sup>嬉<sup>し</sup>野<sup>の</sup>お花<sup>の</sup>宅<sup>を</sup>出<sup>て</sup>、三<sup>社</sup>前<sup>の</sup>お花<sup>の</sup>許<sup>へ</sup>参<sup>り</sup>、又<sup>は</sup>或<sup>時</sup>は奥<sup>山</sup>の割<sup>烹</sup>店<sup>へ</sup>へ参<sup>り</sup>たり、又<sup>は</sup>田<sup>町</sup>の藤<sup>屋</sup>へでも行<sup>ッ</sup>てと云<sup>ふ</sup>やうな事<sup>で</sup>、お互<sup>ひ</sup>に惚<sup>合</sup>ッて居<sup>た</sup>ことですから、いつしか別<sup>な</sup>き交<sup>り</sup>

上げあ<sup>い</sup>様に致<sup>し</sup>ますが、畜<sup>類</sup>でも其<sup>恩</sup>を忘<sup>却</sup>るものは一<sup>疋</sup>もごさいませう、巳<sup>に</sup>鷹<sup>と</sup>申<sup>す</sup>鳥<sup>は</sup>、寒<sup>中</sup>に成<sup>り</sup>ますと、夜<sup>分</sup>は温<sup>め</sup>鳥<sup>と</sup>申<sup>し</sup>て、雀<sup>を</sup>兩<sup>翼</sup>に抱<sup>か</sup>へ一<sup>ト</sup>夜<sup>を</sup>明<sup>し</sup>まして、翌<sup>朝</sup>に至<sup>り</sup>其<sup>雀</sup>を逃<sup>が</sup>して遣<sup>り</sup>ます、その際<sup>に</sup>雀<sup>が</sup>北<sup>の</sup>方<sup>に</sup>逃<sup>げ</sup>、或<sup>は</sup>又<sup>は</sup>西<sup>の</sup>方<sup>に</sup>飛<sup>行</sup>します時は、必<sup>ず</sup>其<sup>方</sup>角<sup>に</sup>向<sup>ひ</sup>まして、位<sup>の</sup>とは辨<sup>へ</sup>て居<sup>り</sup>ます、犬<sup>は</sup>伺<sup>は</sup>れるもの、鳥<sup>類</sup>でさへ其<sup>の</sup>門<sup>を</sup>守<sup>ッ</sup>て、若<sup>し</sup>怪<sup>しい</sup>奴<sup>が</sup>來<sup>た</sup>時は、往<sup>昔</sup>から往<sup>々</sup>ある例<sup>の</sup>者<sup>に</sup>報<sup>ら</sup>せませう、又<sup>は</sup>猫<sup>と</sup>も其<sup>通</sup>りで、往<sup>昔</sup>から往<sup>々</sup>ある例<sup>の</sup>しで、其<sup>飼</sup>はれた恩<sup>に</sup>報<sup>い</sup>る事<sup>が</sup>ありませう、本<sup>編</sup>の講<sup>談</sup>の中<sup>に</sup>例<sup>の</sup>に、未<sup>だ</sup>至<sup>り</sup>て一<sup>疋</sup>の猫<sup>が</sup>六<sup>人</sup>の者<sup>を</sup>殺<sup>し</sup>て、其<sup>恩</sup>人<sup>の</sup>仇<sup>を</sup>報<sup>復</sup>し、佛<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>、誠<sup>に</sup>とらうも畜<sup>生</sup>ながら可<sup>怖</sup>いものでございませう、報<sup>復</sup>すこと云<sup>ふ</sup>様<sup>な</sup>事<sup>は</sup>滅<sup>多</sup>



情と相成りましたが、さて斯う成りますと幾分か金圓の要るやうなとで、今迄のお物堅い若旦那が、急に斯う柔くあつて仕舞つて、御宅でも薄々此事を知り、清三郎の身の上を心配しなからも、マア好いワ、其所が親の慈愛で打棄て置く、三社前ではア、好いお客さんが、お花さんの所へ来たと云つて、近所の茶店では羨ましがつて居ります、併し本人の所得は、餘り好いのでは無いと云ふのは、肝腎のれ花が清三郎には底根惚れでも居りますし、互ひに訝しい交情になつて居ると、尙更お花は清三郎に情慾が増しますから無心の様な事は言つたとはなし、これが通常の客でございましたら「ア、チヨイと旦那、斯う云ふ事で是非金が必要なんだから、萬望貸して下さいよ」と云ふ紋切形を列べて、れ金を巻上げるとも出来ませす、餘談を申上げて恐入りますすが随分散財にでも

行つて、色男顔をして女に結句惚られて居る積りでも、ア、旦那、お母さんが氣分が悪いから二十圓金を貸して下さいよとか、又は益替に芝居に伴つていて頂戴よと、行く度々に無心を言はれましたら、惚れて居る中でも可厭になるもの、れ花は清三郎に惚れて居る位のですら、決して無心と云ふやうなとは申しません、然るに阿母のれ虎と云ふり、お花を幼少の頃貰つて成長く致したので、妙齡にあれば此娘の爲に、左り團扇で暮さうといふ了見のところへ、清三郎と云ふムシが着いたのですから、餘り嬉しく思ひません、併し風聞に聴いて見ると、横山町の上總屋と云へば、東京で一二を争ふ小間物商、同じ小間物と云つても、一から十までありまして、縁日なとに、密柑箱の中に硝子の管や齒磨揚子、或は詰らない三文櫛なとを入れて、賣るやうなものも小間物屋ですが、此上



總屋は舊幕時代には、大名方にお出入を致し、當時は堂々たる官員のお屋敷へ出入を致しまして、一寸の品物を持つて居る家でもあり、先方の宅の息子さんと一緒になつたと云やア、阿母も末の樂み、打乗ッて置けば何うかあるだらうと、軍艦に乗って沙魚釣でもするやうに安心して、阿母も其儘見て見ぬ振をして捨置きました、所が清三郎は一年ばかりと云ふもの、毎日の様に遊びに来て居りますから、随分お金も使ッて本人には遣らないでも飲食の爲めに金子が相應に消えて仕舞ひます、そのうちに店の金を密と百圓ばかり持出してお花を伴れて横濱から、鎌倉、江の島、箱根の方へも行かうと云ふので、駈落をして仕舞ひました、横山町の宅で清三郎の家に出に大きに驚きまして出入の者に申し付け、彼方此方と清三郎の家

郎の所在を探させました、更に行き方が分りません、花の阿母の宅は淺草の富士横町と申して、觀音様の裏手にあります、此事を聞き自分の方も心安い人を頼み、色々娘の所在を探さして見ました、一向相分りません、併し相手が横山町の上總屋と云ふ大家、何れ本人が其うちには立歸ッて来て、伴添ひたいと云ふは心定、其時お宅の嫁にはならぬ、いでも、圖はるれば扶持も来る、若し縁を切らうと云ふ際は、道具を賣ッていも食ひ繼ぎをして居りやア何うにかならうと、ながい眼で見居ります、お話替ッて此方は花、清三郎の兩人は、百圓の金を使ひに、箱根に湯治をして、彼處より伊豆の方へ廻りまして、四十日程の間に悉皆路用を使ひ捨てて仕舞ひました、往昔と違ッて當今の金は、使ひ出がとさ



ません、往昔は忠兵衛が梅川と云ふ女郎を伴つて、廿日餘りに四十兩、使ひ果して二分残した、彼奴は大和の奴だから、未だ二分でも残しました、江戸ッ子なら皆な使つて仕舞ふ、併し清三郎は金のあるうちは、面白可笑く遊び廻りました、儲金が無くなれば、婦人を伴つて旅は出来ず、據るなく東京へ戻つて参り、三日ばかりは宿屋の二階に隠れて居て見ました、たが、銭がなければ証術なく、丁度十月の中旬、お花を伴つて夜分のと、旅亭を出て五妻橋を渡りながら、何處へ行つて身の振方を付けやうと、思案に暮れて居りました、不圖思ひ當つたのは、本所の原庭と云ふ處に、車夫の長藏と申して此者の女房は以前上總屋の宅に永く奉公して居りました、謂は、清三郎の乳母同様の人で、月のうちに二度三度づゝ、上總屋の宅へ出入りも致します、幸ひ此長藏の宅を尋ねて

行つて、暫時厄介にならうと云ふので、お花を伴つて彼是れ十一時少し廻つた時分、原庭の角に蕎麥屋があり、其蕎麥屋から左へ曲つて三軒目の表長屋、主個の長藏は今仕事から戻つて来て、湯に浴つて婆さんを相手に、青申魚の干物と鱈で酒を一盃始めて居る、戸外の處を見ると、二人乗の腕車を片輪抜いて宅内に入れてあると見えて、片方の處には板を究支にして、往來の方へ橋樑の邪魔にならないやうに、軒下へ入れて戸の方へ寄つけてあります、そいつを目印に清三郎は「お花はな、ハイ、清三、此宅は私の宅に永らく勤めて居た乳母の宅だ、亭主の長藏と云ふ者は、恐ろしい頑固な老爺だけ、お前此處に待って、在てよ、首尾が呼けりやア呼ぶから、それちやア貴郎宜しく頼みなさいまし」清三郎は「お花を片



傍の軒下に待たして置いて、長藏の宅の門口に立ち清三御免  
 なさいまし、アノ車屋の長藏さんと云ふのは此方でございま  
 すか……モシ長藏さんと云ふのは此方でございますか」とト  
 ン表戸をたゝきます 長藏「婆さん誰か表戸を叩いて居るぢや  
 アないか 女房「ホンにねへ、モシ誰方ですよ表戸を叩いて居る  
 のは 清三「オヤ婆や此處を開けてお呉れ、長藏「チヨイと此處  
 を開けて呉れよ 女房「オヤ良人、どうやら彼れは横山町の若  
 旦那の聲らしいよ 長藏「違エねへ若旦那の聲らしい、開けて  
 上げやう」と長藏は起つて門の戸を引開け若旦那の顔を見ま  
 すと、悄然として立って居る様な鹽梅 長藏「これは若旦那では  
 ございませんか 清三「オヤ長藏かエ 長藏「長藏かエではございま  
 せんせ、マア貴郎がお宅においでなさらんと云ふので、御親  
 類は云ふまでもなく、出入の者に至るまで、どの位探しま

したか、マア何處へ貴郎おいでなさりました」

第三回

長藏に問掛けられました、清三郎は左も体裁悪げに 清三「長藏  
 私は一寸他所へ行つてたのサ 長藏「一寸他所へではございませ  
 んせ、御宅ではマア御心配の餘りから、貴郎の御母公……私  
 は一日仕事で横山町の近邊迄で参りましたから、裏から這  
 入つて密と御容子を承はりましたら御母公には貴郎の事を御  
 心配で、病つて在ッしやると云ふことを聞きました、其に貴  
 郎マア女もあらうに、江戸の中央の兩國の横山町と云處にか  
 生れ遊ばしながら、之が吉原の金瓶大黒の華魁とか、或は品  
 川樓の華魁を伴つて逃げたとあれば、他の中で話も出来す  
 聞けば淺草の三社前の茶店の女、彼近邊の女なぞといふ



ものは、貴郎御存知はございますまいが、私共が若い時分には、二分出しやア一ト晩抱いて寝るとか一両出しやア自由に  
あるとか、早く言ッて見りやア淫賣見たやうなものでござい  
ます、江戸で一イニウと指を屈れる小間物屋の息子さんとも  
あるものが其様な淫賣女みたらやうな者を伴れて逃たと云はれ  
ては、第一上総屋様の名前にも關はります、モウ好い加減  
に成さいますし、何ぼ若いうちは二度は無とは言ながら、最少  
と氣の利いた女を伴れて逃げりやア、尙だ話しにも成ります  
、イヤ詰らねへ私が御異見を仕たッて役にやア立ねへ、マア  
此方へれ這入なさいまし、御一人でございますか、誰方か御  
同伴の方があるんですか……オ、彼處に立てるのは、お前さん  
誰かに送ッて来て貰たのですか、あなた御苦勞様でございま  
すマア、お寒うございます此方へれ這入なさいまし、若旦那

誰方でございます 清三「長藏お前のやうに然う悪口を言ふと、  
私ア何とも言様がなないよ 長藏「何とも言様がねへッて、彼人は  
何所の人です 清三「お前マア格外目先の見ぬない人だねへ、彼  
女は私が伴れて逃げた、三社前の茶店の娘で花と云んだア  
ね 長藏「エーッ…… 清三「エ、も無いものだ 長三「若旦那マアお前さん  
も分らんぢやございませんか、其お方ならそのお方と言ッて  
下さアリア、私も此様な悪口は言はなかつたに、婆さんは是り  
やア如何しやう 婆「ソレ御覽爺さん、お前は餘り饒舌すぎるか  
ら困るよ 長藏「どうも面目ねへなア 婆「面目ないッて些とは後前を  
考へて言ふが好い、マアあなた此方へお這入りなさいまし、  
宅の爺は彼様云ふ口の悪い男ですが、腹には別段に毒のない  
人でございますから、氣に懸けて下さいますナ」お花は間の  
悪さうには「お婆さん御免下さいまし 婆「サアマア若旦那、貴



郎も御一緒にお遣入りなさいまし」と二人を入れて門の戸を  
ピタリツと閉めました。が長藏が間の悪うございますから長  
藏「ヤッ何うも今の言ア氣に懸けて下さいませ、其やア極大  
昔の事で、私共が十五六の若い時分には、淺草の奥山の茶店  
の女なさア、随分其りや其様な事をした者は幾らもあるんで  
ございます、けれども現今の女は中々其様な事なねへ物堅い  
ものだ、大名のお姫様のやうな者が出て居るから今は大丈夫  
だ」と好い加減に賞め直して居ました。が纏て清三郎に對ひま  
して長藏「併し若旦那お前さんもれ宅の一件の御存知でござい  
ませう、大金を持つて出なすつた、と言つてお宅ぢやア百兩  
や二百兩は、私共の懐中にして見りやア、一銭か二銭位ゐな  
ものでございませうが、何しろ名義が悪い、他の娘を伴れて  
逃げたと言つて見りやア世間体が宜くございませぬ、マア明

日はお宅へ行つて、御母公へ内々で貴郎がお歸りなすつたと  
を、私しや申上げて來ますから、併し御飯を喰ひ成すつた  
か、御遠慮なさいませう、姐さんお前さん御飯は如何ですはな  
「ハイ有難う存じます、妾の最う喫べました長藏「お喫りなら遠  
慮しちやア不可ねへ、此宅へ來りやア若旦那様のお宅も同じ  
とだ、私共夫婦の者は若旦那様のお宅に永へ間奉公した者で  
す、何うぞ遠慮しねへで腹が空つたら、飯でも食つてお呉ん  
さいは「有難う存じます、遠慮は致しません長藏「そんなら若  
旦那、二階へ昇つてお就枕なさるが好いオイ、婆さん其方の  
蒲團を二階へ上げな、さうして若旦那をお寝かし申したら如  
何だエナニ腰が痛へつて昇れねへ、仕様がねへナ、若旦那憚  
り様だが、此蒲團を二階へ持つて昇つて下さいまし、婆さん  
枕がゐるかナ、一ツしかねへ、若旦那枕が一ツだ、お前さん



二階に箱か何かあるから、男は介意ねへ、女ッて者は頭飾が大事なものだ一ト晩です、明日にありやア私しやア又何うでも枕の都合しますから、今夜だけは辛抱して下さいまし、姐さん便所は裏だよ、便所に行くから、婆さん手燭を点けて上げな、姐さん便所は能く見て置かねへと何時又行くか知れねへ、私共の枕邊を通つて、どう不遠慮なしに行つて下さいましはな「色々御親切に有難うございます、左様ならお休みなさいまし長藏「それぢやア明日の朝お店へ行つて来ますよ」とこれから清三郎、お花の両人は二階へ昇つて行きましたか狭い宅でも旅亭と違つて、自分の家來の宅へ来たと思へば、氣も安心して枕に就きました、下では長藏夫婦の者、残つた酒を飲みながら長藏「婆さん己アこれ今年五十八になるが、今夜の様なら、面目ねへ事を言つた事アねへや婆「格外爺さんお前が出過ぎ

るから彼んな事になるんだよ長藏「併しまア何だなア、言やア言ふやうなもの、中々吉原の華魁でも彼様な好い標致は無へ、深草の三社前邊の茶店の女には似合はねへ品の有る好い女だなア婆「然うさねへ、若旦那の嫁には丁度好い年輩だよ長藏「遠へ無へ、それがマア立派なお宅のお嬢様なら、結局申上げて嫁にでも頼めるんだが、何うも場所が場所だからさう云ふ譯にも行くめへよ」と夫婦の者はお花の噂をしながら酒を飲んで居ると、表の戸をトン／＼

○モシ鳥渡此處を開けてお呉んなさいまし、モシお前さん宅は車屋さんだねへ、何卒車一挺行つて貰ひてエ「宅内では長藏がお氣の毒さまだが、夜分の仕事には私やア出ませんよこれから吾妻橋の方へ行きあさると、客待をして居る車屋が幾らもありますから、彼方へ行つてお頼みあさい

○オイ吾妻橋で客待をして居る車を、



お前に指圖をされねへでも、乗りたけりやア勝手に乗るんだ、お前の所に燈火がさして居るから、車に乗らねへでも、鳥渡提灯の燈火だけ貸して貰ひてエものだ、お氣の毒だが燈火を一ツ貸して呉んなさい……モ一ッ寝てお在でちやアねへ、口をきいて居る、鳥渡燈火を一ツ貸してお呉んなさいナ長藏「婆さん厭煩なア、御近所の前もある、扱外怒鳴らせずと、マア戸を開けて燈火を點けて上げナ」據るなく婆さん門の戸を開けまして婆「サア提灯を此方へお出しなさい、燈火を點けて上げませう」御免なさいまし、恐ろしい、夜が更けて来たとは言ひあがら、寒くなりましたねへ門口から這入ッて来たのを見ると、双子の拾に算盤形の三尺帯を前で結び、突掛の麻裏草履を穿き、年輩三十恰好な可厭な野郎でげす、今宅内へ這入ッて来て、上り端の處へ腰を掛け○爺さん滅法界

寒いなア 長藏「へエお寒うございます、お前さん何か御用でございますか」○「イエ別に用と云ふ譯ぢやアねへ、爺さん、マア一服貸して呉ねへナ 長藏「こりやア驚いた、表を開けさして燈火を借んに来て、お先煙草とはこりやア恐れるかア」○「愚圖愚圖言ふにやア及ばねへ、一服貸しねへナ」言はれて老爺は不承々々ながら「サアお嗅りあさい」と出す件の男は伊勢の壺屋の紙煙草入、真餘の駄六の煙管に煙草を詰めて嗅みながら、可厭な目付をしてチロリと宅中を斯う見廻して居ります、爺さんや婆さんは堅氣なんでございますから、可怪な奴だと思ッて始終先方の容子を見て居ると○「お婆さん、お茶一杯お呉れナ 婆「アラ此人は色々な事を言ふよ 少し茶ア温いよ」○「温くツても好い、大きに有難うございます」茶碗を取ッて茶を嗅みながら、二階の梯子段に目を着けて○爺さん、オイ爺



さん 長藏「何だエ ○何だッて然うれ前のやうに慳食に言はねへ  
でも好いや、訝う麻風呂敷の中に茄子でも入れた様に、ギス  
ギス言はねへでも好いちやアねへか」と言ひながら二階に目  
を着けまして「オイ爺さん、ね前ん宅は宿屋でもするかエ長  
藏「エッ……………」

第 四 回

長藏は大きに驚きまして「長申藏言ッちや不可ねへや、此様な  
小さな宅で旅宿が出来ぬものか ○然うだらうねへ、正敷か前  
ところは旅宿の行燈も出てぬへやうに思ッて居た、併しれ前  
とは淫賣の宿でもするのだナ長馬鹿を言ひなさんナ此  
人は、乃公の宅は其様なをした覺は無へせ、何處でそん  
な事を聞いて来やアがツた ○エウ怒んなさるナ、怒らなくッ

ても可い、證據が無くッて言ふ氣遣ひはねへや、乃公ア淺草  
の富士横町の傳次と云ふ者だ、乃公の隣長屋におとら婆さん  
と云ふ者がある、其娘のれ花と云ふが三社前に茶店を出して  
居たが、聞きやア横山町の小間物屋の息子が伴れて逃げたと  
のと、阿母のおとらさんはそれが爲めに、肝心の店の代物が  
無くなッたと云ふんで、毎日商賣もせず、宅で酒ばかり飲  
んで心配して居らア、何うか傳次さんお前さんも世間を歩き  
なさるから、若し娘を見當ッたら妾に知らして呉れど、度々  
乃公頼まれて居るんだ、オイ爺さん今お前の宅へ這入ッたの  
ハ若い男と若い女、言はずと知れた花と清三郎、其本人を  
出して貰はうと思ッて来たんだ、愚圖々々言はずに二人の者  
を此處へ引摺り出せ長馬鹿な事を言へ、乃公ん宅ちやアそん  
な人を隠圍た覺はねへや、傳ナニ隠圍た覺はねへ、無へか



「一」と大きな聲揚げる、傳次は「エ、ッ婆ア奴、喧ましい」  
 と足を上げて婆さんを蹴倒しました、微弱い女の事ですから、  
 其勢ひに上り端を踏外して額を打ち、ム、ウンと氣絶をした、  
 様な搦梅、爺さんも永年添ッて居た女房が目眩し死んです、  
 から長誰方か来て下さいヨ、一人殺だアイッ」と怒鳴る、此方  
 の傳次は二階へ飛び昇ッて、花と清三郎の寝て居る奴を捉  
 まへかゝりましたして、二人共に逃げ様と致しました、何しろ  
 一方口の二階にて、逃げる事が出来ません、傳次は清三郎と  
 お花を引張り、二階から下へおろしまして傳「サア兩人ながら  
 阿母の宅へ伴れて行くから、愚圖々々言はずに一緒に來い」  
 と二人の者の襟首を捉まへて、已に戶外に引張り出さうと致  
 します、車夫の長藏はこいつア逆も一ト通りぢやア叶はねへ  
 と思ツたか、一生懸命に聲を揚げて、業平橋の方へ駆出し

有るか先刻から乃公ア跡を尾けて來たんだ、手前の宅へ今道  
 入ッたのを確かに見て乃公ア言ふんだ、知らねへと言やア仕  
 方がねへ、二階へ昇ッたのを引摺り下すが良いか」言はれて  
 婆さんは側で心配を致しながら「婆ア」此人はマアどんでも無  
 い事を言ふ人だよ、妾の宅では其様な事は覺ははない、其  
 やア多分家が違ッて居るだらう傳馬鹿な事を言へ、宅が違ふ  
 か違はねへか、戶外に車の置いてあるのを目印に通入ッて來  
 たんだ、愚圖々々言やア二人を業平橋の屯所へ引張ッて行く  
 が、それでも汝等は言ひ分はねへか」斯うきめつけられて堅  
 氣の爺さん婆さんは眩驚いたして、可怖々々二階の容子を  
 て「るうちに、傳次は草履を脱いで飛び上り、梯子段を昇ら  
 うと致します、上へ昇ればお花と清三郎の身の上に関する事、  
 長藏は傳次を止めやうと爲る、婆さん「誰方か来て下さい  
 有るか先刻から乃公ア跡を尾けて來たんだ、手前の宅へ今道  
 入ッたのを確かに見て乃公ア言ふんだ、知らねへと言やア仕  
 方がねへ、二階へ昇ッたのを引摺り下すが良いか」言はれて  
 婆さんは側で心配を致しながら「婆ア」此人はマアどんでも無  
 い事を言ふ人だよ、妾の宅では其様な事は覺ははない、其  
 やア多分家が違ッて居るだらう傳馬鹿な事を言へ、宅が違ふ  
 か違はねへか、戶外に車の置いてあるのを目印に通入ッて來  
 たんだ、愚圖々々言やア二人を業平橋の屯所へ引張ッて行く  
 が、それでも汝等は言ひ分はねへか」斯うきめつけられて堅  
 氣の爺さん婆さんは眩驚いたして、可怖々々二階の容子を  
 て「るうちに、傳次は草履を脱いで飛び上り、梯子段を昇ら  
 うと致します、上へ昇ればお花と清三郎の身の上に関する事、  
 長藏は傳次を止めやうと爲る、婆さん「誰方か来て下さい



すると、前方の方より角燈を照らし、昆棒を小脇に抱へ込み、此方へ来かゝります。査公、それと見るより長藏は、呼吸も急しく「モシ旦那、何卒お願ひでございます。巡査何ぢや周章しいお願ひとは、見れば既足で今頃如何したのだ長へエ私の宅へ今亂暴者が参りました、何卒来て下さいまし。巡査ナニッ亂暴者だ長へエ。巡査「亂暴者どおつては棄て置けん、何處ぢや。巡査「向ふの燈火のさして居る宅が私の處でございます。早巡廻の査公、長藏諸共駆付けて参りますと、此方の傳次は兩名を引張り連れ出さうとして居ります。折から靴の首を開いて、こいつア堪らねへど、お花、清三郎の身の上に関ッては居られませんから、自らは既足の儘戸外へ飛出し、吾妻橋の方を指して逃げ出しました。處へ査公ハ長藏諸共やッて参り、家内へ這入ッて婆さんの介抱を致しお花、清三郎の面

人に段々尋問を致しました、其處で前の次第を兩人及び長藏夫婦より交々申し述べました、査公は透一聞取りますと、これが他の女房を伴れて逃げたと云ふではございせんから、兩人の者に色々説諭を致し、且つ長藏にも餘り夜中に高聲を發し、從今斯う云ふ事のないやうに言ひ置いて、査公は其儘引取りました、其晩は氣味悪ながら皆々臥りましたが、翌朝に相成ッて長藏は横山町の上總屋に立ち越後、お厨所の方へ廻りまして長お松と旦那様は今朝飯田町までお出でにありました長へエ、アノ旦那様は今朝飯田町までお出でにありませぬが御病氣は如何でございます。長「それぢやア何うか長りから大分お宜しよございます。……長「それぢやア何うか長



蔵が参ッたと云ふ事を、御新造様に申上げて下さいませ。まづ  
 ハイ、暫時待ッて、下さいと、女中のお松は奥へ参りまして  
 まづ申上げます。細君「何たエ松、まづアノ本所の車屋の長藏さん  
 が参りまして、主婦に御目に懸りたいと申して居ります。細君「  
 オヤ長藏が来ましたか、介意ないから此方へ通して、呉れ松「  
 畏まりました。……アノ長藏さん此方へお上り長「御免下さいま  
 し」と上へあがり案内に伴れて奥室へ通る、見ると蒲團の上  
 に御新造は坐ッて在ッしやいます。細君「サア長藏此方へお通入  
 り長「御新造様御無沙汰を致しました、此間は鳥渡御病氣の事  
 を承りました、一遍お見舞ひに出なけりやアならないと、宅  
 の婆さんも、話をして居りましたが、イヤモウ貧乏暇なしで  
 ツイ／＼御無沙汰いたしました。細君「オエ妾の方も無沙汰をし  
 ました、何かエアノおてつは何處も不快でないかエ長「有

難うございます、お庇蔭さまで達者でございます。細君「然うか  
 エ、マア長藏茶を喫り長「有難う存じます、エー今日私が  
 参りましたは、他ぢやアございせんが、昨晩十一時過ぎで  
 もございまして、若旦那様が私の宅へお出でになりま  
 した。細君「アノ何かエ、清三郎が……」と悴の清三郎が歸ッた  
 と云ふ事を聞きまして、其處は親子の情愛でがす、嬉しさの  
 餘り目に一ぱいの涙を含みながら、さも嬉しうに蒲團の上  
 から半分下りかける様な塩梅長「どうぞ貴婦、れ冷いなすッて  
 はなりませんから、マアお話此處で致します。細君「アノ長藏  
 何かエ悴はどんな扮装をして歸ッて来ました長「へエ、御身装  
 は餘り御立派はございませぬ。細君「然うだらうねへ、妾やア  
 此間中から彼の子の夢ばかり見て居りました、別に身体の不  
 快ことはないかエ長「へエ、身体は御達者でございます、



御安心なさいまし、細君「して彼の子は一人で歸つたかエ長へい  
 甚だ申上げますのも口憚つたい事でございませうが、例の女を  
 伴れてお出でになりました、細君「アノ何かエお花と云ふ女を、  
 れ前の所へ一緒に伴れて行つたのかエ長へい、細君「それはそれ  
 は、一晩でもお前との厄介、長藏「誠に氣の毒だねへ長何う  
 致しまして永年御恩を受けました手前共、御世話と云ふ程の  
 事は出来ませんが、其れに就きまして奥様、昨夜は實は是れ  
 是れの次第で……」と有りしと物語りを致します、長藏  
 親は聞く度に「これに就きましてどうも只今斯うと申しま  
 は、尙も詞を續ぎ「これに就きましてどうも只今斯うと申しま  
 す、生木を裂くやうなもので、實は私も淺草三社前の茶店  
 の女だと聞きまして、何んな者だと、見ない先は思つて居り  
 ました、夜前の容子を見まして、今朝はとも何かの事は婆

さんと話しを致しましたとで、マア淺草邊りの茶店の女には  
 似も寄らぬ折か、何でも以前は由緒ある所の娘だつたさ  
 うで、今の貰はれて行つた先の養母は、如彼いふ稼業をして  
 居りますから、兎角潮情な所もありませうが、中々見上げた娘  
 でございませう、斯う申すと何だか長藏が詞に品を飾つてお執  
 成でも致すやうに、思召もございませうが、決して私は飾つ  
 て申上げるのではございませう、有の儘のお話を致しますの  
 で、今若旦那様とお花さんとの中を別ると云ふ譯にも成り兼ね  
 ぬます、若い中のごさいますから、何んな無分別なお心  
 をれ出し成されうも知れませう、そればかりを私はお案じ  
 申して居ります、母親「ア妻も其事は思はぬでなかつた、一  
 人の悴ではあり、淵川には蓋はないと云つて、若し無分別な  
 氣を出されて、第一上總屋の家名にも關りませう、寧ろ此事



を旦那にお話しを申して見たものであらうか、長藏、如何したものであらうね」と、膝前ませて問ひかくる、子を思ふ親心でございませう。

第五回

長「サア私もそれで昨夜から婆さんとも相談をして居りましたとで、併し旦那様に申し上げました所で、若旦那が可愛いからと云って、御親類の手前もございませうし、又お店の衆の手前もございませうから、直ぐとお宅へお入れ申すと云ふ次第にも参りますまいし、奥様此處は一ツ考へものでございませう、そこで私の思ひますには、上總の姉ヶ崎には、御存じの通り私の伴の與吉が参つて居ります、彼の貴女座船の船頭を稼業に致して、只今でハ夫婦の中に子供が一人出来まして、マア

何うにか斯うにか生計を立て、居ります、幸ひ彼の野郎の處へお兩人様を、手紙を添けてお遣り申して置きましたら、他の噂も七十五日、百日たらずも行つてお在でなさいましたら其間には旦那様の幾分かお心も和らぎ、御親類へも好い様なお話をして、そこで若旦那をお宅にお入れ申すやうに致しましたら、如何なるものでございませう、細君「妾も爾う思つて居るが、それではお前彼の子の事を宜しく頼みます、長宜しうございます、左様になりますれば私も一ツ上總へ手紙を先に發送して置きました、其上でお兩人様を彼地へお立せ申しませう、細君「それでは長藏宜しく頼みます」と病人の母親は起つて簞笥の抽斗から、金子五十圓を取出し、母親「それではどうか清三郎に此金を遣つて下され、そして長藏、此の櫛と簪は何卒お前持つて歸つてね、未だ妾は面會たことはないけれども、そのお花



本所の我宅へ立歸て参り、有りし次第を物語りに及びます、清三郎は母親の情けに感じ、誠に私の不量見から、お父さんやれ母さんに心配を懸けたと、根が溫柔しい息子でありますから、實に涙を翻して悦び、お花も側でもらひ泣を致しました、長藏は早速手紙を認めて上總の姉ヶ崎なる與吉の許へ先に出し、清三郎お花の兩人は寒空にも向ひましたとですから、それ、衣類の支度なぞ致し、斯くて五六日を過しました、幸ひ今日は日和も好しと、東京を出立致すとに相成りました、この姉ヶ崎と申す處は、東京を出立して陸を行けば三白路かゝります、船で行けば彼の行徳へ出まして一ト晩にも行けます、が、船に乗って行くには小網町まで跡戻りを致さねばならず、他目に立ッてはならぬと云ふ積りで、兩人は本所より新宿へ出まして、渡場を渡ッて上總路へ出掛けました、茲に上總

と云ふ者に渡して下され長、畏まりましたと云います、細君「そしてね、これは些と地密だけれども、彼の女にも着られるならうから、持ッて着せて遣ッて下さい」と御召縮緬の綿入と縞子の丸帯を取出し、之を風呂敷に包んで渡し、別に金子を五圓紙にくるみ、細君「これはお前歸ッたられてつに何か買ッてね遣り」と長藏の前へ差出しました、長藏は大きに恐縮の体にて「長、これは有難うございます、毎度出ます度に頂戴致して、婆さんも無ぞ悦ぶでございませう、折角の思召し頂戴致して置ます、細君「何卒長藏、言ふまでもないけれど、清三郎の身の、又花と云ふ其の娘の身の上を宜しく願ひますよ、長委細承知致しました、行き届きませんが、ア上總へおやり申し、置ますれば、安心と云ふやうなものでございませう」と是から長藏は風呂敷包を携へ、横山町の御宅を暇乞ひして、



國東金在の三好村と云ふ所がございまして、此處の座船の船頭を稼業と致す興吉と申す方を、兩人は漸くの事で尋ねて参り、彼の長藏よりの手紙を出して、云々の譯柄と頼み込みますると、興吉はかねて親父の許より参った手紙で、事の次第は承知致して居りますし、殊に親父や阿母が大恩を受けられた家の息子さんではあり、叮嚀に初對面の挨拶を致して、是れより夫婦の者も萬事に氣を注げてお世話を致して居りました、併し繁華な處でお育ち成されたお方で、どうも邊鄙な三好村と云ふやうな處にお在で成さつては、若旦那も御退屈がぢだらうと、太く心配をして居りましたが、幸ひ直き近傍の姉ヶ崎と云ふ處は、燈明臺も出來、旅亭は申すに及ばず、料理屋も五六軒は出來たと云ふ、當時開けかけた地にて、追々東京近傍の人々も入込み、チヨツとした船着でございますか

ら、同トとあら姉ヶ崎の方へお出あそばす方が、マアく御退屈の中にも少しは見れる物もあらうからと、夫婦の相談の上若旦那に其の話を致しますと、清三郎も結局其方が好からうと云ふので、姉ヶ崎へ清三郎お花の兩人を遣るやうの相談が纏りました、そこで此姉ヶ崎には興吉の親分にて、座船の船頭勘太郎と申す者がございます、此の勘太郎と云ふ男は在下でも一寸侠客と云はる、到つて深切な仁でございますから興吉は兩人を伴れ當家へ参り、斯様々々云々と清三郎お花の身の上を萬事話しましてどうぞ、宜しう頼み申すと頼み込みました、勘太郎も早速承知の上、茲で兩人の者を自分の宅に置いて世話をすることに成りました、清三郎お花の兩人も勘太郎の深切を嬉しく思ひまして、凡そ一月ばかりは遊んで居りましたが、或日の事清三郎は花に對ひまして清一はなやは



な「ハイ清「マア此通り姉ヶ崎も段々開けて来るし、私も斯うして厄介に成つて居るが、それも與吉の宅だつたら、マア氣兼ねのないと云ふ様なものだが、併し當家で見ると他人様だ、毎

の、お花も藝妓にでも出て、御纏頭の一寸も貰つたら、旦那のお小費ぐらゐはあるだらうと、思ひます所から、此處で勘太郎に此話を致しますと、勘太郎も一度は止め、二度は異見をして見ましたけれども、何が若い人達の思ひ立つたと



縁げないといふのでなく、明治五六年頃にはひから開けかけ  
た姉ヶ崎の事もある、未だ檢番と云ふものもございせず、只自  
分で三味線を持つて行つて弾く位ゐの藝妓です、謂は  
乾娘半分の藝妓半分の云ふ様かもので、別に線香一本幾金と云  
ツて花を賣ると云ふ譯でもなし、唯御纏頭を當てにするだけ  
の藝妓、此處でお花は漸くの事で藝妓に出ました、何しろ  
容色は美し、他の藝妓と違つて腕前がチヨイと出来るので、  
彼處の茶屋此處の茶屋とそれ〴〵印しの手拭を配りますと、  
勘太郎と云ふ親方の坐敷を借りて居ると云ふので、何しても  
一割の徳でございます、出ました其日よりお花さん〴〵と、  
樓から乙樓からも呼びに来ると云ふ様な事で、清三郎も今  
では纏頭に貰つて來る金にて、此金で小費も氣兼ねなしに使ひ  
勘太郎も出して見れば相應に客人にも最負にされますから、

マア大きに自分も世話をした効があると思つて居ります、  
併し此儘なりで何事も騒動がなければ、別にお話は要らない  
様な勘定ですが、所謂月に叢雲花に嵐の譬で、此れより愈々  
大騒動を惹起します、お話し、一服いたして次回に申上ります。

第 六 回

この姉ヶ崎に、五右衛門茶屋と緯名を博り、茶屋と旅籠屋を  
兼帯に致して居りまして、先づ當地では第一等の旅亭でござ  
います、所が此五右衛門茶屋へ、姉ヶ崎より二十町ばかり隔  
つた處に、海防村と云ふのがございまして、其村に賭博を以  
て世を渡る、今辨慶の音五郎と云ふ者があります、開明の  
今日では賭博の業と云ふものは、皇國一般にございます、  
が、併し箇様な事で他に知られて居る音五郎が、折節は此



五右衛門茶屋へ遊びに来て、酒を飲んで歸ります、土盛が猫の額見た様な、小さな處で生れた奴だから、世間知らずで、俗に云ふ獨り權隨院とも云ふ奴で、大きな事を言ッて、錢も澤山の使ひませぬけれども、五右衛門茶屋でも餘り可厭な取扱ひをしたらば、他の事でもしッペい返しをされると、思ひますから、参りまする度々に、親分お出でささいまし、親分お出でなさいましと、機嫌取りを致して遊ばせまする、其處で此音五郎と云ふ奴は、時折には花を呼んで、他の藝妓に三十錢しか遣らない纏頭も、花には半圓の一枚も遣ると云ふ様な塩梅で、太くお花には肩を入れて居りまする、お花も行く度に五右衛門茶屋では、大切の客だと云ふ話を聞きまして、成るだけ可愛がられた方が徳だらうと思ひ、程を售る上にも、愛嬌を振舞ひて、座敷も体裁よく取り廻して勤めて居

りまする、尙々音五郎はお花に想ひを懸けまして、始終お花とお花と言ッて、呼ぶ様にして居りましたが、丁度或朝のと、五右衛門茶屋から若い者を以て勘太郎の宅へ若者「へエ御免なさいまし、今日ははな「ハイ誰方若者「ヤアお花さん、今朝海防村の親方さんからね、今日ハ些どんベエ客をするから、何うか、お前さまばかりぢやアねへ、他にも藝妓の二人も寄越して呉れると申して参りましたが、マアお前さんだけは、先に來て貰はなけりやア客をするにも亦下物の相談、それこれ用意もしにやアなんねへから、早く來て貰ひてエどのお頼み、それでマア出掛けて参りましたが如何あもんだんベエはな「ナア鳥渡アノ待ッて下さいましよ」お花も早朝の事でもあり、清三郎に此話を致しますと、清三郎も今では半分家業見た様なもので、成るべくなら行ッて來たら如何だと勤めまするると



は奇「妾もね、御最負に成ッて居て言ッては濟まないけども、餘り行きたくないんですよ清「行きたくないッて、それが勤めだ、マア行ッて成るべく早く歸ッて來たら如何だ はな「それで はさう云ふ事にしませうと是れからお花は一寸衣物を着換へましてはな「松「ア、それぢやア三味線を持ッて行ッて下さい ナ松「ハア私持ッて行くべし はな「アノ天神を折らさい様に持ッて行ッて下さいよ 松「大丈夫だ、乃公もハア永いこと茶屋に奉公して居るのだ、三味線杯折る様な事は無へから、大丈夫でがす はな「それぢやア清さん行ッて來ますよ 清「ム、早く戻ッて來いお花は使ひの男に三味線を持たせ、打伴立ッて五右衛門茶屋へやッて参りました、亭主ハ「オウお花さん、御苦勞さま、大變早く呼びに遣ッて、行ッて下さるか はな「サア不斷から御最負に成ッて居ますから、参りませよう 亭主「そればマア

氣の毒だ、二十町ばかりあるが不自由な處だから、腕車は無し、氣の毒だね はな「何う致しまして、それでは行ッて参ります」とこれから松藏と云ふ若い者に三味線を持たせましてお花は海防村の音五郎の宅へと出て参りました、松藏は先に這入りまして「松「ね早うございませう」先方は博打の宅ですから、何うせ居ります者は、長エ物を短く着る様な道樂者ばかり、二三人臺所で朝飯を喫ッて居りました、ね早うございませうと云ふ聲を聞いて 子分「誰だ、誰だエ 松「エ、五右衛門茶屋から参りました 子分「オウ御苦勞だった、なにか藝妓を伴れて來たか 松「へエ花さん一人だけ伴れて來ました」と言ふ、其うらお花も門口から這入ッて参りまして はな「御免下さいませ線其處に置いて此方へ上ッてお呉れ はな「御免なさいませ、そ



れぢやア松つアん後に迎ひに来てお呉れよ松「宜うございます  
 好い加減の時分に迎ひに参りますから左様なら」場所の檢番  
 の若い者とは違ひまして田舎の人ですから、とことなく文盲  
 な所がございます暇乞をして松藏は歸つて仕舞ふ、お花は子  
 分の者に案内をして貰つて奥室へ通りますると、音五郎奴、  
 いま起きたと云ふやうな塩梅で、顔でも洗つて是れから朝飯  
 でも喫はうと云ふ所はな親方、お早うございます 音五「オウお  
 花か、ア、早かつたナ、乃公ア又出て来りやアしめへと思つ  
 て居た、マア茶でも喫みナ はな有難うございます」そのうち茶  
 を煎れて子分の者が持つて参りました、茶を喫みながらお花  
 は「ア、親方さん、今日はお客様は何人でございます 音五「サア  
 どうで乃公の仲間の奴等が来るのだから、何人と云つた所が  
 十人も来るか知らん はな「左様でございますか、他の藝妓衆の

..... 音五「誰か二三人呼びに遣つてあるから、来るにやア違ひ  
 なからうが、マアいゝや、客が来てから緩々呼びに遣つたら  
 可いやはな「けれども何ですよ、れお客様がお出でに成つた時分  
 に、間違突いてたり何かすると、随分体裁の悪いもので、お  
 肴や何かの事は、お指圖を申しては恐れ入りますが、最う如  
 何でございますか、御用意は... 音五「イヤ肴なんざア、どうで  
 乃公の所へ来る奴等だから、好い加減な物で可い はな「左様で  
 ございますか」お花も始終座敷の様子を見て、今日お客をする  
 と云ふのには、座敷の鹽梅がチト可訝いなと心の中に構ない  
 やうではありまするけれども、来たものですから直に歸ると  
 云ふ譯には行かず、ア、飛んだ處へ来た、と心配ながら座敷  
 へ座つて居りまする、そのうち酒の爛をして其處へ持出した  
 音五「サア一盃やらう、朝酒ア嬬を質に置いても飲ひと云ふ往



昔から譬もある、一盃やらうは有難う存じます音五「マア、  
 一盃飲みナはな「ハイ」とれ花は否々ながら盃を受け、これが  
 妓に出て居る勤めだと、進まぬながら座敷を勤めて居ります  
 る、其うちに已刻も過ぎ午刻と成つても客らしい者は、一人  
 も来るやうな様子もなし、お花は益々不思議に思ひましては  
 な「親方さん、未だお客様は……音五「イヤ最う少と遅くなるだ  
 らう、まだ少と早いはな「さうでございますか、それでは客  
 様がれ出で迄の間、實は妾も今日はお客様の約束があるん  
 ですから、一遍歸つて出直して参りませうよ、直に戻つて来  
 ますから、少しの間やつて下さる譯には行きますまいか音五  
 ヤイ、馬鹿言へ、乃公宅へ来て呉れたからには、乃公宅  
 の客を勤めて行つて貰はなくツちやア……さうで手前も先に  
 約束があるか知らねへが、それ程聞へてるもんから、乃公の

所へ来て呉れんけりやアい、のだ此の奴が十圓出しやア、乃  
 公の所でも十圓出さア、眞更海防村の音五郎の錢は、通用し  
 ねへ譯でもあるめへはな「イエ親方さん、マア貴郎のやうにさ  
 う仰しやいますと妾は困ります音五「困るッてさうぢやねへ  
 か、乃公宅で客をしやうと思つて呼びに遣つたんだ、それに  
 肝心客の来る時分に、手前に歸られて其跡で、野郎ばツかり  
 で客を取持つ事は出来ねへ、怒るぢやアねへが、マア話しや  
 ア其様なものぢやアねへかはな「イエ無理にやつてお貰ひ申さ  
 うとは致しませんが、お客様がチヨイと遅くなりますれば、  
 一遍先方の座敷だけを勤めてと思つて申上げたんですから  
 萬望お腹を立てないで下さいまし音五「ナアユ乃公ア別に腹も  
 背も立ちやアしねへが、餘り手前が言ひ過ぎるから……マア  
 好い、野郎、酒を此處へ持つて来い子分「ハエ子分の奴は銚子



を運ぶ、音五郎は大きな盃で酒を飲んで、チロロとお花の  
顔を見て居ります、お花はア、氣味が悪いナと思ひながら  
正敷逃げて歸る譯にもなりせず、我慢をして座敷に座つて  
居ります、音お花は「ハイ音手前も藝妓ならナア大抵  
解つて居るだらう乃公が此節五右衛門茶屋へ行つて呼ぶ度々  
に、大した錢も使はねへが、マア他の者に五十錢遣りやア、  
手前にや一圓も遣るやうにして居る、音五郎が遊びに行く  
度の錢の使エ盤梅を見りやア、大抵手前も察しさうなものぢ  
やアねへかナア、お花は「ハイ親方さん妾のやうなもの其様  
な事は些とも知りませんよ……。」

第七回

音「へッへッ」知りませんたッて、ナア十二や十三の子供ぢやあ

アあるめへし、聞きやア江戸を食詰めて、此上總の姥ヶ崎へ  
來る位エな事だ、眞更知らねへと云ふ様な事もあるめへ、ナ  
アお花は「何卒マア親方さん、其様な詰らない事は堪忍して  
下さいよ音堪忍してッて、乃公が手前を捉へて、無理往生に  
得心させやうと云ふんぢやア無へ、話やア話だ、一盃酌げ、  
マア好い、不承言はねへで一盃酌げ」ア、可厭と、思ひなが  
ら尙もお花は「シツト堪へて、酒を酌いで居りましたが、此様  
な事なら結句來なかつたらよかつたど心配をして居ります  
折柄臺所より這入ッて参りました一人の男、「へエ親分、今歸  
ッて來ました音オワ傳次か傳へエ音早かつたナ傳エ」今日は  
ね、實ア少し昨宵ッから次郎右衛門さんの宅で紛擾が出來た  
んで、都合よく行きませんでしたが、鳥渡明方に切れて仕舞  
ッたものですから、親分に其話をして置いて呉れろと言ッて



して音「オイ傳次傳へエ音此お花は手前知ッてるのか傳へエ、  
 こりやアね前々ん東京に居た時分にやア、随分此姐さんのね  
 庇蔭で、葉平橋の屯所へも伴れて行かれた事があつたんです  
 ねへお花さん、想出しやア最う彼れ是れ小一年にもなるねへ  
 はな「ハイ傳如何したエ清さんは、はな「最う彼の人は、離れま  
 した音「巧く言ッて居やアがる、真更彼の位ゐに想ひを懸けた  
 んだ、離れるやうなとはあるめへはな「エ最う真に離れまし  
 たのでございませよ▲さうか、清さんに離れて此姉崎へム  
 ムウ……阿母アと来て居るのかはな「エ一人で来て居ります  
 傳「ム、ウ一人でこいつア不思議だナ、何處に居るんだエはな「  
 ハイ彼の勘太郎さんの宅に厄介に成ッて居ります傳「さうか、  
 お前が此方に來て居る事は、乃公ア些ども知らなかつた、親  
 分、この藝妓時々お前さんお掲げなさるんですか音ム、この

ました、何れ次郎右衛門さんが四五日うちには、お目に懸  
 ると云ふ傳言なんです、音「然うか、それぢやア昨宵は餘り好  
 くなかつた傳「へエ、顔が二三枚足りませんでして、餘り好  
 さいませんでした音「然うか、マア好いや、一盃やれ傳「有難う  
 ございます、大層陽氣で……」と傍の盃を取り、お花の釣い  
 で呉れる酒を飲まうとして、互に顔を見合はせまして傳「オウ  
 お花さんぢやアねへか はな「オヤ傳次さんですか」と双方互ひ  
 に驚きました傳「ヤア珍しい所で、お目に掛かりますねへ はな「マ  
 ア貴郎も御壯健で傳「乃公の壯健も可いが、お前も達者で結構  
 だ、マアせうして此地へ來なすつたへ はな「ハイ東京にチヨイ  
 ツと居憎い事が出來たので……」と傳次の顔を見た所から、  
 半分は口籠ッて、何う云ふ話をしたら好ぶらうと、思案顔を  
 して居ります、音五郎は譯を知りませんから不思議に思ひ



藝妓の一件ぢやア、乃公も五右衛門茶屋にやア月に十度も十  
 五度も遊びに行くんだ、ハ、アさうですか道理で五右衛門茶  
 屋と箸の揚下しにね前さんが仰しやッて居たが私やア些ども  
 氣が付かなかつたハ、ア此一件です、音然うよ傳今日また此  
 處へ来て居るのは、何か譯が有ッて、来て居るんですか音其  
 りやア乃公だッても譯が無けりやア、正敷此處へ呼やしねへ  
 また先方も譯が無けりやア来る因縁もない、さうぢやアねへ  
 か、ナアお花は「ハイ……」と氣が氣でなく、お花も心配を  
 して居るうちに、便所に行つたら逃げて行かうと思ひま  
 すけれども、便所に行けば子分の奴が附いて来ますから、然  
 う云ふ譯にも行かず、如何したものだらうと心配をして居る  
 彼れ是れするうち、最う日の暮れ方に成ッて参りました、お  
 話かはッて此方は清三郎、参ッた儘お花が戻ッて来ません、

なんば藝妓勤めとは云ひながら、餘り座敷が長くなりませ  
 ば、清三郎の身に取ッて嬉しい譯なものでございません、  
 アー、遅い、如何したのだらうと案じながら、晝飯を喫ふのも  
 一人で喫ふのだから、心持よくも喫へず、彼れ是れ最う燈火  
 の點く時分と成りましたが、まだ戻ッて参りませぬので、清  
 三郎は益々氣を揉みまして、清親方勤、オ、若旦那、何です清  
 花はまた歸ッて参りませぬが……勤、ア朝早くから呼びに来  
 て、今頃まで戻ッて来ぬと云ふのは……待ねへ、乃公ア一遍  
 誰か聞きに遣ッて見やうと、早速若い者を五右衛門茶屋へ  
 聞きに遣りますると朝から海防村の音五郎の許へ行ッて居る  
 と云ふ事を聞いて立歸りました、子分親分勤、オウ如何だッた子  
 分へイ行ッて聞きましたら海防村の今辨慶の所へ、朝から花  
 に行ッてると、斯う五右衛門茶屋では言ふんがす勤、ナッニ



音五郎の所へ……子分へエ勘アツ其いつア夫策ツた、飛んだ  
 事をした」と勘太郎の心配がちな顔を見まして、清三郎も心  
 ならず清親方、如何したのございます勘「イヤ清さんこれだ  
 から乃公が最初から止めたのだ、マア藝妓に出て居りやア、  
 前さん方ア若いれ身体だから、前後を考へ無へで、只藝妓  
 にでも出しやア、好いやうに思ッて居なさるだらうが、彼様  
 な客が呼ぶやうに成ッて來ると、どの人なら花にも行き、又  
 どの人なら花にやア行かねへ、と云ふ様な事も云へねへ仕宜  
 になるんです、マア併しお花さんに限ッては、豈夫間違ひな  
 事はなからうと思ひますけれど、相手の客が餘り好いのぢ  
 やア無へんでげす、これが御村方の戸長さんとか、又はお役  
 人さんとか云ふやうな方々に呼んで貰ふのなら、其りやア三  
 日が四日でも構やアしません、何しる相手は在下で評判の

無頼漢音五郎と言やア随分この近邊ぢやア風の神見たやうに  
 他が可厭がる奴です、其奴の宅へ朝ッから花に行ッたもあり  
 やア、こいつア辻潤には歸しちやア寄越しませんよ清「それで  
 は親方、兎に角私が一遍迎ひに行ッて來ませうか勘「お止しな  
 さい、却ッてお前さんが行きなさるやうなとだど、納る事も  
 納らなく成る、マア待ちねへ、其うち誰かを以て、私が迎ひ  
 に遣るから、其様々に心配なさらぬが宜うございます清「ハイ  
 有難う存じます勘「マア乃公に任して置きねへ、悪いやうにや  
 アしませんから」と勘太郎は誰か迎ひに遣らうと思ふうちに  
 仲間の者が來て、先頃東金の喧嘩の一件、其事で色々話しも  
 盛み、ツイ其方を取紛れて、表座敷で一盃やりあがら、頻り  
 に話しをして居ります、此方は清三郎、座敷の内此起ッた  
 り坐ッたり致しなから、親方が迎ひに遣ッてお呉んなさると



第 八 回

は言ひながら、未だ誰も迎ひに遣った様子もなし、こりやア  
 寧ろそのことに私か迎ひに行つたら、そのはうが早手廻した、  
 と止せば好いのに清三郎勘太郎に任して置きましたら、別段  
 に仔細も無いのでございませうが、何しろ自分が惚れたお花の  
 事で、早朝から行つて戻つて参りませぬ、相手は在下の博賭  
 打、正敷さう云ふ事はあるまいと思ひますれども、心配の  
 餘り潜り宅を出まして、彼の海防村と云ふ、半途足らずある  
 隣村へ、夜道を急いで清三郎、お花を迎ひに参りました、こ  
 れが爲に自分の面体に傷を負けられ、已にお花の生命にも係  
 る位ゝな騒動を惹起しますお話しと相成りまするが、鳥渡一  
 ト息いたしまして申上げます。

引き續いて御披露いたします、人間は五情と申して近頃餘事  
 を申上げるやうで恐れ入りますが、夫婦の情、親子の情、兄  
 弟の情、朋友の情、又色の情と、この五情の中で親子の情の  
 この狸婆奴死んじまやアがれと言つて居ても、直に後で打解  
 けて仕舞へば元の親子、また夫婦は、その親にも語らぬ位ゝ  
 な事を、随分夫婦の中で、互に語り合ふ位の情の深いもの  
 でございませぬ、嫁アが毎日側に附いて居て、風邪を感いた、  
 それ薬、災難に罹つた、天神様へ既詣をするとか云ふのは、  
 これは夫婦の情でございませぬ、併し紙一枚に三行半を書いて  
 別れた日にやア、大道で顔を見合つても、口を利かない様な  
 事に成ります、根が他人だから、そりやアさうありさうなと  
 其中にも色の情はこれ、別段なもの、丁度自分の宅に澤庵漬  
 の旨い漬物があつても、隣の宅の漬物が大變に旨いやうに思



ふ、俗に云ふ、他の花の赤いと云ふのり、大方このとでござ  
 いませうか、鳥渡散財にでも行つて朝辰と云ふやゆを、マア  
 好いから今日一日居積をしなさい、イヤ乃公ア最う歸る、ナ  
 二用が有つても好いから、お前さんに散財はさせないから、  
 妾がこの櫛や簪を賣り拂つて何うでもしますから、今日は  
 日遊んでね在でなさい、と言はれりやア、そんな大切な用が  
 有りまして、ツイその情に悪されて遊ぶ氣になります、併  
 しこいつが毎日夫婦の中でやつた日にやア大變でございます  
 朝起きて仕事にでも出掛けやうと云ふ時、マア今日は一日た  
 休みな、イヤ今日は是非仕事に行かぬやアならぬ、マア好い  
 やね、妾の物品を質に置ても、今日一日お休みよ、毎々こ  
 の情に悪した日にや、堪りません、今日一日お休みよ、毎々こ  
 ると、遂にハ高歩の金でも借りて、驅落でもしなければなら

ぬ様な事に成ります、それですから同じ情愛でも大變違ひの  
 あるものでございます、餘事はさて置いて本文を申し上げます  
 この清三郎お花もその通りで、夫婦の情もあり、色の情もあ  
 りますから、また一ト際別なもので、日の暮れ方に成つても  
 お花は歸つて参りませんから、大層心配をして、何うしやう  
 斯うしやうと、思案に餘つた所から、勘太郎にも相談もせず  
 半里足らぬもありません、海防村へ迎ひに出掛けて参りました  
 來て見ると早速音五郎の宅も分り、門口より清三郎御免下さ  
 いますし、子分誰だ、今頃御免なんて戸外から聲を掛け  
 るのは清三郎姉ヶ崎から來ました子分姉ヶ崎から、何か用が  
 有つて出て來たのか清三郎へエ藝妓のお花を迎ひに來ました子分  
 ア、ちやアお花の迎に來たのか清三郎へエ左様でございます子分  
 マア少し待つてる、今奥にお客があるから、さう急かぬへで



「可い清此方もお客様が問へて居ります事で、何うか御最負  
 は有難うございませうが、御當家ばかりに勤めて居りますと  
 他のお客人へ對して不都合に成りますから、お花を一遍お返  
 しなすつて下さいませし、子分然う言つて乃公がハア計ふ譯にも  
 行かねへのだ、マア待ッちる、一遍親分に聞いて見るから、  
 其處に待ッちる清萬望お早く願ひます、子分の者は奥室へ這  
 入ッて、親分音五郎に此事を執次ます音ナニ姉ヶ崎からお花  
 を迎ひに來た子分「へエ音ム、ウとんな奴が出て來た子分「サア  
 二十……さうでがす三四にも成るべエか、色の白い役者見た  
 襟な野郎でございませう、餘程美い男だ、親分、お前から見る  
 と、男振好いぞ音何を吐かしやアがるんだエ此野郎、男の美  
 い醜いを聞いちやア居りやアしねへ、兎も角その野郎を此方  
 へ呼べ子分「へエ」と子分は早速清三郎を奥の座敷へ通します

る、片傍に坐ッて居たれば、ア、飛んだ事をした、ビヨ  
 としたら清さんでも來やアしないか、他の人なら好いけれど  
 も、若し清さんなら大變だがど、お花は心配をして居ります  
 此方は案内に伴れ奥室へ通ッて清三郎敷居腰に清エ親方、  
 毎度御最負に有難うございませう、アノお花さん五右衛門茶屋  
 と兜屋の方で、最前から三度も四度もお出でに成ッて例もの  
 渡邊さんと云ふ、姉ヶ崎の旦那がお出でに成ッたと云ふ事で  
 度々のお人でございませう、何うか一遍彼方へ行ッてお貰ひ申  
 しませんと、また勘太郎さんも心配をして居りますから、何  
 うぞ一遍お歸りなすつて下さいませし、はな大きに御苦勞さま、  
 妾やア直後から戻りますから清然うでございませうけれど、  
 萬望一遍歸ッてお貰ひ申しませんと、彼方の方が大變不都合  
 でございませう音「オイ、お前何か、男衆か清へエ私はお花



さんの……江戸から附いて参ッて居ります男でございます  
音、ハ、ウ、サウかお花、この仁は何かお前の伴れて来た男衆か  
はな「ハイ音、然うちやアあるめへ、男衆とは違ふだらう はな「イ  
イエ親分何でございますよ、チヨイと妻の親類の仁で……音  
へッへ巧く言ッて居やアがる親類なんて、男衆なら纏頭を遣  
るから、之れを持ッて行け」と財布から百文銭五六枚を取  
し音「サアこれで煙草でも買ッて喫め」とビシヤリ投着けた  
そいつが飛んで来て一枚のやつが清三郎の額に當りました、  
もどく、興る氣ではございません投着ける、丁筒で投けたの  
ですから堪りません、額に當ッた爲に擦傷のやうなものが出  
来た、清三郎は額を抑へながら清大に有難う存じます、  
親分様、之れを私に呉んなさいませるか音「然うよ、煙草でも  
買ふ錢に遣ッたんだ、持ッて行け、併しお花の身体は、今夜

まだ乃公宅で客をするんだ、未だ客が見ねへから、お花の  
身体は歸す事は出来ねへ、明日の朝にでも成ッたら迎ひに來  
い清へエ有難う存じます、明日の朝まで此方のれ客が待ッ  
て居りませんから……音「エ、ッ喧しい事を言ふなエ、先方も  
客なら此方も客だ、海防村の音五郎の錢だッて通用しねへ事  
もあつるめへ、何だエ錢を出しやア賣物に買物だ、乃公宅へ呼  
んである藝妓を、未だ客も來ねへうちに、歸して呉れると云  
ふ奴があるものか、お花の身体ア滅多に歸しやアしねへから  
宅へ歸ッて然う言へ」之れを聞いて大家の若旦那ではありま  
するし、天保錢の三枚や五枚投着けられ、加之に額口に傷を  
負けられ、ア一残念だとは思ひますけれど、西も東も碌々  
に知らない上總の姉ヶ崎、便りに思ふ勘太郎さんは、今夜仲  
間の寄合ひで話も切れず、辛抱し兼ねて迎ひに來て、斯う云



日にやア退つたらねへ、今からこのお花の手を切れ、それと  
 も手前何か言ひ分でもあるのか清傳次さんとやら、私やア貴  
 郎を深くは存知ませんが、さう御存知なら仕方がございませ  
 ん、東京三界を騷落をしまして、この姉ヶ崎へ参りまするに  
 は、餘程私もお花ゆゑに苦勞を致して居りまする、萬望さ  
 う仰しやりませんで、お花をね戻しを願ひまする傳ナニツ、  
 へッへ、親分お聞きなすつたかエ、この野郎マア他人の前  
 も憚らねへで、此様な危端い所で惚けてけつかりやアがる、  
 ヤイ若い奴、此處へ来てこの青二才を引摺り出して擲んで仕  
 舞へ」とこの聲を聞いて、臺所で酒を飲んで居た四五人の子  
 分の奴等「へエ大哥哥何か用が有るのか傳用が有るから呼んだ  
 のだ、この野郎を戶外へ引摺り出して擲んで仕舞へ」子分合點  
 でがす」と二三人行きなり清三郎の襟首を捉まへる清アレ

ふ目に遭つて残念どの思ひながら、目にもる涙を内に隠し我  
 慢をして居りまする、所へ唐紙をサラリツツと開けて立ち出で  
 た一人の男「オイ清三郎、巧く瞞着しやアがるナ、他の者は  
 知らねへが、この傳次が見た日にやア、手前が幾ら隠したッ  
 て役に立たねへ、オイ清公、この傳次の面を豊夫見忘れは  
 しめへナ清へエ！貴郎は……傳貴郎はぢやアねへや、乃公ア  
 浅草の富士横町に居た、肩書の付いたしびたけの這入ッた乃  
 公の身体、豊夫傳次を見忘れやアしめへ、清公、この上總の  
 姉ヶ崎邊まで女ア伴れて騷落とは、へん随分可通な世界だ  
 ア、親分、此奴アお花の情夫でがす音ナニそれぢやアこの野  
 郎がお花の情夫か傳へエ左様です、此奴ゆゑにやア女も大分  
 苦勞して居ます、清公、この傳次が豊夫海防村の親分の宅に  
 居るとは手前も知らなかつたらう、最う傳次が目掛かつた



出し、三郎は心外には思ひまするが、對方は大勢此方は一人、中々  
 叶ひさうな譯はなし、そのうち傳次も出て來まして傳次公が  
 好い後は悪いと云ふのはこれだ、ヤイ打殺しても可い奴だが  
 御時節柄だ、命やア助けて遣る、併しお花の身体ア、今夜ア  
 此家の親分の所で一晩泊めるから、手前諦めて虫を殺して  
 歸れ、愚圖々々すりやア命が無へぞ」と胸倉を捉へて、清三  
 郎をドシり突飛ばし傳次「昨日來い、馬鹿野郎め」其儘宅  
 内に這入り、塩を持ッて來て、清三郎の頭へ振り掛けました  
 其儘表の格子障子をビタリツと閉めて、後には若い奴を相手に  
 傳次は大聲を發げて嗤ッて居ります、此方は清三郎、ア  
 ア口惜しい、汝れと言ひさま障子を開けて宅内へ這入らうか  
 と思ッたが、イヤく這入ッた所が、また打たれるより外に

第九回

清三郎は子分の者に打擲られまして「アレ、ド、い、萬望御  
 勘辨なすッて下さいまし、根が大家の若旦那、斯う云ふ荒く  
 れない博打杯どり、中々腕競の出來さうな譯がございませ  
 し、清三郎の身に怪我をさせないやうと、そこはお花も惚  
 れた男の事をすから、清三郎の身の上を案じて居ります、  
 此方は若い奴等、清三郎のワア、言ふやつを戸外に引張り

ツ、れ前さん方はマア私を如何なさいます、子分何うも斯うも  
 あるものか、手前には用が有るから此方へ來やアがれ」ど  
 情用捨も亂暴漢、行きなり清三郎の頭上を目かけてビシヤ  
 り打擲りました。



仕方がない、此上怪我をしては請らない、此りやア寧そのと  
 姉ヶ崎へ戻って、勘太郎さんにこの話をしやう、アア残念  
 な事だと、男泣に涙を翻して、急いで戻って来た、海防村を  
 距離道の七八丁も来ると、道の片傍に六地藏、十三日の月も  
 上り、隈なく牙の渡り居る月を眺めながら清三郎は「ナア  
 東京に居たら此様な苦勞もしないものを、花ゆゑとは云ひ  
 ながら、阿父さんや阿母さんに不孝を掛けた皆罰だ、姉ヶ崎  
 へ来て花をわいふ藝妓に出したばツかりに、マア此様な  
 目に遭って残念だ、併しお花の了簡では、別段心變りはある  
 まいが、若し今夜彼の音五郎の許に一ト晩泊したら、それこ  
 そお花の身の上が何うなるか知れない」とそこは惚れた女の  
 事、自分の身体を痛いのをも打ち忘れ、女の身の上を心配す  
 るのは、如何にも夫婦の情と云ふのは此處でもございませう

か、借れ話が替って此方は船頭勘太郎、仲間の話も忽々にし  
 て切上げ、皆々は歸つた後、勘「ヤイ留吉留へエ勘若旦那は如何  
 なすつた留エ！若旦那ア最前親方が話をして居る間に、何だ  
 か心配さうな顔をして、裏の方から出て行つた塩梅です勘ナ  
 ニ若旦那は裏口から出なすつた留へエ勘そいつア大變な事を  
 した、ア、失策つた若い方、後前見ず、乃公が彼れだけ異  
 見をして居るのに、ア、お花の歸りが遅いと云ふんで、大方  
 心配をして居るのには、ア、お花の歸りが遅いと云ふんで、大方  
 イ留へエ勘乃公の雪駄出せ留へエ」勘太郎は三尺帯を締め直  
 し、五六年前までは上総、房州で随分人に知られた宮相撲で  
 ございまして、今は素人には成りましたが、中々力量も強う  
 ございます、紅草二筋の鼻緒の着つた雪駄を履いて、我家を  
 立ち出で、スタ／＼海防村へ急いでやつて来た、丁度六地藏



る子供ぢやアあるめへし、如何なすツたのだ、下を向いて泣いて居ては話が解らねへから清親分、聞いてお呉んなさいまし、實は斯うく、斯様の次第で……」と今まで音五郎の宅にて、ありし次第を物語りに及ぶ、始終を聞いた勘太郎「ム、ウ左様でございませうか、サア私も其様な事に成るだらうと思ッて、貴郎のお行でなさるのを止めたのだ、マア能うございませう、若旦那お前さんこれから宅へお歸りなさいまし、私が聞いたからにやア、例令どの様な事があらうとも、直に花さんをお伴つて戻りますから、先へ歸つて待つてお在でなさい、清併し親方、先方は六人も七人も居りますから、お前さん一人ぢやア心元なうございませう、私も参りませうか、勘否お前さんが来て呉んなすツたら、却ッて足手纏ひに成つて面倒だ、私一人の力が大丈夫だから、安心してお歸りなさい、花さん

の處へ來ると、悄悄と致して清三郎は立歸つて來る、月明りに透し見て勘「オウ若旦那ぢやアございませんか、清「オウ親分でございませうか、誠に面目次第もございません、勘「ア、泣き聲を發げて面目次第も無へッて、お前さんも男ぢやア無へか、如何したのです、お花さんを迎ひに行つたのですか、清「へエ勘「チヨッ、(舌打)困ツたなア、それだから私が言はね、事ぢやア無へ、ア、あれ待ちなさい、見りやアお前さん衣物が大變に破れて居るし、顔に斯う傷でも負いた様な藍梅だが、何うかなすツたのか、清親分口惜しうございませう、勘「カウさうな前さんの様に泣いてばかり居て、譯が解らねへ、男が口惜しいと云ふ事は中々の事だ、マア待ちねへ、遠慮の無へ六地藏とは云ひながら、また何處に何う云ふ者が聞いて居まいものでもねへ、見苦ねへから泣かずに話をしなさい、十や十二に成



んの身の上は、屹度私が引受けましたから、今にお花さんの  
 手を引いて伴れて戻ります、サア早く帰らなさい」と勘太  
 郎が受合ッて呉れた言葉に、清三郎も力を得まして、後には  
 心は残りまするけれども、併し親方があゝ言ッて呉れたら、  
 最う大丈夫と、安心をして、清三郎は姉ヶ崎へと立歸りま  
 借勘太郎は其足で海防村の香五郎の許へ出掛けて参ります  
 併し勘太郎の了簡でも、一ト筋細ではお花を戻すまいと、色  
 色思案をしながら、香五郎の宅の門口へ来て、宅内の容子を  
 覗いて見ますると、五六人も宅内に居る様な塩梅、勘免な  
 いまし、子分「ハイ誰だ、勘へエ姉ヶ崎から参りました子分  
 姉ヶ崎から……」と子分の者の表の戸を開ける、續いて這入  
 ヲッて来たのは、艦船の船頭勘太郎でございませうから、子分の  
 者は屹然として、一人は奥室へ飛び込んで親分にこの話をす

香五郎は、ア、お花の一件で勘太郎奴、到頭尻を上げて來や  
 アがッたナと思ひましたから、此方も其の用意を致しまして  
 音「マア此方へ上げる子分へエ……」サア此方へお上りなさい勘  
 御免下さいましと上にあがりました勘太郎、併し時節柄です  
 から、切物の様な者のある氣遣ひはなし、また先方も強ひて  
 亂暴をすることを氣遣ひもあしど、双方その思案をして座敷へ  
 通る、お花は好い所へ親分が來て下すつたと、大きに力を得  
 て居ります、勘太郎は音五郎に對ひ勘さて親分、改めて勘  
 太郎が可厭な舞詞を言ふやうですが、其りやア東京邊の柳橋  
 とか、又は新橋とか云ふ様な、檢番のある所の藝妓なら、隨  
 分三日が五日、十日が百日側に置かうか、線香一本が幾らと  
 いふ花が付いて居りやア、客人の事あら仕方も無へが、それ  
 でさへも品に依りやア、挨拶位にやア幾らも行けるんです



殊更この姉ヶ崎藝妓と云ふぢやアなし、ホンの乾娘半分座敷へ出て、お客の氣嫌氣襪を取って、三味線の一ツも弾きやア細頭を賞ふと云ふだけのと、ね前さんは道樂家業の商賣柄だ其様な可笑な事をしねへで、相手は弱い藝妓稼業、ねへ、何うか返して遣ッてお呉んなさい音ナニ可笑く柄の無へ所へ、柄を附けた様な話をして呉れるなエ、乃公が何もこの女を執心でも言ふのか勘そりや親分、執心の有る無へと言ふのは、そいつア素人の話だ、ねへ斯うして、勘太郎が出て来たからには、長エ短エを言はず、何うか花を返して下さいまし、否が諾でも私が来たからにやア、この女の身体ア私が作れて行しから、又この女はチユイと他から退引ならねへ事で私が頼まれたので、この女の身体に付いては、チイツと私に頼手がある音ム、この女の事に就ちやア手前に頼手があると

ぢやアこの音五郎と喧嘩でも仕様と云ふ心算で来たのか勘りやア面白い、小哥の方から事は好まねへが、喧嘩と云やア開け行く今日、時節が違ふが賣る喧嘩なら随分勘太郎買ひもしやう、今でこそ座船の船頭はして居るが、この七八年前までは宮相撲を取って、長脇差の交際もした者だ、可笑な怖い臺詞を言はれたッて、へン別段屹驚するやうな勘太郎ぢやアねへや、賣る喧嘩なら何時でも持つて来い音を吐しやアが「と音五郎は片側に在った煙草盆を取って振り上げる、此体を見て傍に居たお花は「アノ一ツ」と慄へ出しました。

第十回

エー音五郎の亂暴に、勘太郎も中々負けて居りません勘サア喧嘩なら引氣は取らねへ、来やアがれ」已に起ち上り、双方



に止まる、この騒動に海防村の戸長、渡邊半左衛門と云ふ仁戸外から這入ッて参りました。何だエ、コレ夜分に成ッて、雷のうらとは云ひながら、大聲を發けて騒ぐと云ふのは何う云ふ事だ。勘こりやア旦那でございますか。半「オッ見りやア勘太郎ちやアないか。勘へエ半「またお前も大人しくもねへ、此處へ來て喧嘩沙汰アするといふのは好くねへ、如何したのだ。勘「エ中々私に限ッて、其様な事をする者ではございませへ半「それは然うだらう、お前はこゝ七八年前まで、同じ家業の中で勘「マア旦那聞いてお呉んなさいまし、實はこれ、斯様な渡邊の旦那は透一聞取りまして半「ム、ウ、音五郎「音へエ半「りやア汝が好くねへ、なんば汝の所で客をするかは知らね

騒動にならうといふ、この有様に子分の者は、駈着けて参り間に這入り子分「マア、親分、お待ちなさい音「エ、ッ打捨ッどけ、エ、ッ其處をけ、子分「マア、親分、其様事云はずにお待ちなさい、龜、親分を止める、サア、勘太郎止る」と子分は双方の間に這入る、音五郎は尙も片傍へ在ッた煙草盆を取ッてポカリリ投げる、勘太郎に投げる積りが、過ッて子分の龜藏の頭を大か打ちました。龜「ア、痛エ、親分、私だ音「オッ手前だッたか。龜「手前だッたかちやアございませぬせ、小者の頭ア打かれたら此方が堪りませぬ、ア、痛エ音「ム勘太郎へ手が届かねへから、手前で間に合はして置いたんだ、龜「冗談言ッちやア行けません、他の間違ひとは違ッて、頭を擲られる間に合はせ扱は、餘りどッといたしませぬせ」漸くの事で双方の間に這入り子分は引き分けました、お互ひ



が、藝妓を朝から側に置いて、還して遣らねへと云ふのは、  
汝の仕方が悪い、勘太郎の云ふ様に還して遣れ、何もこれが  
客をする時には、酒の間を取持つのが藝妓だ、客の居ないの  
に、汝が何時までも側に置くどあつては、それは何と言はれ  
ても、世間へ對し聞きなりが悪い、還して遣れ音へエ半乃公  
が此處へ来て聞いたからには、汝の言ひ状は立たねへから、  
還して遣れ、縦し汝の方に、どの様な好い理屈が有つた所が  
汝が商賣が商賣だ、勘太郎であれば塵船の船頭をもして、置  
は、歴然とした家業が有る、汝で見ると家業の無へ身体だ、  
出る所へ出りやア、汝の方が何うも好くねへ、村方の乃公が  
見ても、汝の方が好いとは思はねへ、サア乃公の居るうちに  
その女を還して遣れ音へエ宜しうございます半乃公、  
汝やアまた他の宅へ来てから、喧嘩沙汰アしては、誰が聞い

ても大人しくもない、サアお花を伴れて歸れ勘大に旦那有  
難うございます」禮を述べお花を伴れて、音五郎の方を立ち  
出でました、後で渡邊の旦那、音五郎に懇々と説諭をして、  
聽て旦那もお歸りなさる、この始終の様子を傳次は次室に隠  
れて見て居りましたが、傳分音オウ傳次、アア残念だ、然  
うでせうけれども仕方かねへ、勘太郎の野郎、彼奴中々確か  
りして居る奴だ、また何處かで仕返をする事も出来ませうか  
ら、マア我慢なさい」二人は話をして、餘つた酒を飲み、  
寐て仕舞ふ、此方は勘太郎、お花を伴れて姉ヶ崎へ戻つて來  
る、清三郎は鶴の首を見たやうに長くして、門外へ出て待ッ  
てる所へ二人の姿、清親方大きに何うも有難う存じます勘若旦那  
那、マア無事に伴れ歸つて来て何より安堵、併し戸外で立話  
もなるまい、宅内へ這入つて話をしませう」どこれから三人



宅内に這入り、火鉢の際に座を占め、勘さて若旦那、他ぢやア  
ねへが、斯う云ふ事があつて見ると、何うも貴郎方二人は、この姉ケ  
斯う云ふ事があつて見ると、何うも貴郎方二人は、この姉ケ  
崎には置き悪い、といふは、彼奴等ア又どんな事をしねへも  
のでもねへ、私やア介意はねへけれども、お花さんの身体は  
畢竟言やア坐敷へ出なけりやアならねへ家業、今度坐敷へ出  
た時に、何ういふとで彼奴等が、また無理な事を言ふまい  
のでもねへから、悪い事は言ひませせん、今夜のうちに東京へ  
来りなさい、此處へ来てからも最う餘程になるし、東京の  
噂も好い加減に無く無つた時分だらうから、最う東京へ歸り  
なすつた所で、別に御両親もさう何時までも御立腹も有りま  
すまい、私も能くは知らぬいお前さん方の身体を預り、此後  
二人に喧嘩でもさした曉は、私も與吉に對して済ませせん

から、マア支度をして、今夜のうちにお出でなさい、清大に  
何うも親分有難う存じますと、此處で二人は忽々に支度をす  
る、勘太郎は内の若者に送らせて、これから野島と云ふ處へ  
出て、木更津へ漸くの事にやつて参り、其處で木更津から船  
に乗つて、兩人は東京表へ立歸りました、お話をかりまして  
勘太郎の方は、最う清三郎とお花も居なければ、ヤレ、と  
安心をして居ります、けれども他に仇敵を求めたと云ふ念  
があまりますから、當人も何となく油断は致しません、所が二  
三日経つて、丁度三好村の與吉の處へ参りました、二人を東  
京表へ歸した事を物語り、其他用事を済まして戻つて参りま  
したは、丁度姉ケ崎へ這入らうといふ手前に、十町暖といふ  
粟畑がございます、その處へやつて参りましたは、彼れ是れ  
十二時過ぎと云ふ時分、月も隈なく河を渡り、大きな聲で鼻



歌を唄ひながら通りかゝる、此時栗畑の中に隠れて居たのは  
 音五郎傳次を始め子分四五人、それと見るより両側から飛び  
 出して参りました、勘太郎は何者ならん、遂巡をして様子  
 を鏡ツツて居る間に、ソレ勘太郎は言ひながら、左右から獲  
 物を持つて飛び込んで来る、別段此方は喧嘩をするつもりも  
 ございませぬから、獲物は持つて居りませぬ、不意に出られ  
 たので頭上を殴られた、アツと言つて勘太郎は倒れる、  
 ソレツと言ふので乗掛いて四五人、勘太郎を袋叩に殴打る、  
 その中音五郎の持つて居たのは、檜の棒でもあるか、餘程重  
 い物で、勘太郎の腕を太かに殴打つたから堪りませぬ、到頭  
 勘太郎の右手の腕の骨を折つて仕舞ひました、勘ム、ン、ア  
 此奴等身性な奴だ、サア殺すなら殺せ、子分「オウ時節が時節  
 だから、命やア助けて遣る、此間の仕返だ、如何だ骨身に堪

へたか」と寄つて集つて尙も打ち据ゑやうとする、音五郎は  
 「命を取るナ」と聲を掛けましたから、急處を避けて子分の  
 奴等、尙もビシヤ、一殴打ちました、切つた傷でございま  
 せん、打つた傷ですが、餘程打ち處が悪いと見ゆ、最う氣絶  
 をしさうを盪梅、勘太郎の細の息で勘ム、ン、ン、と呻  
 ツて居る所へ、向ふの方から通りかゝりましたは、一ト村離  
 れた青柳村といふ處の者で、これも矢張博賭渡世の青柳猪之  
 助と申して、これは音五郎よりは一枚上の顔で、年齢も四十  
 恰好の人物、子分の者を二人伴れて、話しながらに來かゝる  
 するとム、ン、と呻る聲が致します、不思議さうに子分の  
 一人「親分、どうやら喧嘩のやうですせ」栗畑の中から透し  
 て見ると、四五人一人猪善悪の事は分らねへが、一人の方  
 を助けて遣れ、子分「宜うございます」と二人の子分、何しろ博



賭場の歸途ですから、刀こそは持ちませんが、夜分の事とて用意のステッキ、猪之助も共に、と駄付けて参りましした猪「ヤイ此奴等ア飛んでもねへ事をしやアがる、一人を相手に寄ッて集ッて殿つと云ふ事があるか、サア青柳猪之助だ、何處の奴だ」と大きな聲で怒鳴りながら、飛び込んで来た、その勢に音五郎の方も、問答々々して居て怪我でもしてはならねへと、其儘子分諸共粟畑の間を潜り、何處ともなく逃げ出して仕舞ひました、跡に倒れて居る勘太郎の側へ来て猪「オイ確氣しナよ、オイ……」両三遍呼んで見ると、勘太郎「〜」と呻ッて居る、月明に透して見ますと、此は如何に、兼ねて見知りの姉ヶ崎の勘太郎でございます猪「オウ貴様に、勘太郎ぢやアねへか勘へエ誰方ががす誰方……」と言ふ聲も苦しき息づかへ猪「ア、飛んだ事をした、オウ周吉周へエ猪」

第十一回

勘太郎だ、確かり抱いて起して遣れ」そこで勘太郎を引起して、何う云ふ譯だど話を聞いても、當人の身体は半死半生に成ッて、只ム、ン〜と呻るとばかり猪「こいつア捨て、置けぬへ、野郎、手前と周吉と二人で、勘太郎を負ッて遣れ」これから彌三松、周吉の二人の子分に、勘太郎を負はせて、遠くもなき姉ヶ崎、勘太郎の宅へと伴れ歸りました。

斯くて醫者を迎へます、早速醫者も来て身体の手當をする、そのうち勘太郎は苦しい中にも勘大に何うも親分有難うございます、實は斯う云ふ譯でございます、初まりは何者だか分らないかッたが、同じ場所になッて命を取るナと言ッた聲は海か海防村の音五郎の聲でございました、その音五郎にお



合な話にでも成って仕舞にやア、此方が勘太郎の代りに成ッ  
 て、傷を負けて、上の御厄介に成ッても濟まねへ、飛んだとだ  
 も、これは寧ろ勘太郎は永年心安い中だから、何うかア話をし  
 て遣りてエ、御上沙汰にしないうやうと、色々思案しながら海  
 防村の戸長、彼の渡邊といふ旦那、田舎に稀ある開けた御仁  
 だから、此處へ行ッて青柳猪之助は、段々話を致しました、  
 波邊の旦那も之れを聞きまして半飛んでもねへ奴だ、彼様な  
 者を村方に置きたくもないけれど、彼れも村に生まれたる者  
 だから仕方がない、勘太郎の身体を捨て、置けば、今日にも  
 屯所へ届けるやうな事であると、事件が大きくあつて話も、  
 面倒だらう、乃公が話をしてやらう、どこから波邊の旦那  
 は、勘太郎の許に出て参りまして半ヤイ勘太郎、腹も立たう

前さん御存知はねへが、實は斯う云ふ次第で、私も遺恨を受  
 けて居るので、息苦しく荒増物語を致しました「猪ム、ウ  
 そいつア何しろ卑怯な奴だ、マア併し身体を大切にしろ」  
 勘太郎は女房の無い仁でございますから、子分の者が寄ッて  
 集ッて色々手當を致しました、明くる日に相成ッて猪之助も  
 早朝から自分の用を打捨ッといひて勘太郎の所へ出て参り、  
 段々様子を知り、切ッた傷ではございませぬから、大きに好  
 いやうなもの、併し腰の骨を酸み折られたと云ふ騒ぎです  
 から、起つ事も如何にする事も出来ませぬ猪「イヤ口惜しからう  
 手前此様お目に遭ッたのだから、音五郎に一通掛合ッて遣ら  
 う」と青柳猪之助も音五郎の許へ掛合に行かうかとは思ひま  
 した、併し彼の野郎も無鉄砲な野郎だから、程の好い話を  
 して呉れりやア、中に這入ッた中人の顔は立つが、若し不都



青柳猪之助と云ふ仁の顔もあるし、また村方の戸長さんも、中へ這入って下されたのですから、餘り強い事でも言やア、遂には自分の身体も村には居られねへやうなと、せつちにし、た所で自分の方の好い事でもなし、幸ひこの兩人の言葉に委せまして、到頭中直と云ふ事に相成りました、併し勘太郎の身体も彼のやうな傷を負けた事ですから、音五郎には其様な事、のさせられませぬが、猪之助と渡邊の旦那から金を五十圓と云ふもの、膏藥代として勘太郎に渡しました何うしても取らぬと言ふのを、それでは私共二人が中へ這入って気が済まないと言ふので、無理無体に之れを勘太郎に渡しました、病人の勘太郎の事だから、中直の席には進まれません、夫れ故勘太郎の名代に、彼の與吉が中直の場に座つて、盃の遣取をして、事件を圓く納めて呉れました、誠に何うも事件穩便に

が、猪之助が中へ這入つたのだから、御上沙汰にしないうやうに乃公に委して呉れ、悪いやうにはしない、勘太郎も之れを承はりまして、勘旦那有難う存じます、私もこれが紙や煙草を賣るやうな堅氣な商人なら、これだけの傷を負けましたんで、すから、御上沙汰にもしたうございますけれど、以前が道薬をした私の身体、今更他に打たれたから傷を負けたと云つて、そいつを上沙汰にするのも意氣地のねへ話です、ヤツ宜しうござります、打たれたのは前の世で悪い事でもあつたんだと思つて諦めますれば事は済みます」と、誠に温順しい話をして呉れまするので、猪之助も渡邊も中へ這入つた効がある、勘太郎の方を宥め、其上海防村へ参り音五郎に會つた上、段々と説き付け、初めのうちは一ト言や二タ言無法な事を言つては見ましたけれども、時節柄ではありまするし



了簡が出た、幸ひ宅は男ばかりの事ですし、若い奴等も二三人居りましたけれども、晝間の座船の船頭の事ですから、それ處らに誰も居ない様子、唐紙を開けて這ひ出して来て、其處の片傍にかゝつて居た出齒庵丁を取つて、再び座敷に這ひ戻つて来て、蒲團の上に坐り勘アア此様な事なら、宮相撲を取つて居た時分に、立派な喧嘩でもして死んだ方が勝だつた、思へば、彼奴に此様な目に遭つて死ぬのは残念だなア、と獨語を言ひながら、已に咽を突かうといふ、此時片傍の窓から、ニヤーンと啼きながら、這入つて来たのは一疋の斑猫、大きい事は矮狗ほどある猫です、勘太郎の側に來て、ゴロ／＼と咽を鳴らして、膝の所へ凭れかゝりました、勘一オッ、斑、手前も恩は知つてるだらう、今から八年前に乃公が

納つて宜しい様なもの、詰らないのは勘太郎でございます、他の事を自分の身に引掛へて、これだけの傷を負けて、毎日は女氣と云ふ者はございませぬから、何うしても病氣の介抱にも手が行き届きませぬ、癒れば好いのですが、段々この傷が重く成つて参りました、腰が痛んで堪りませんが、だから獨り病室に在つて「ム、ン、ン」と呻りながら勘アア詰らぬへ、彼の野郎のお庇蔭で此様な傷を負けられ、連も乃公ア腰が立たぬへ、元の様な身体には成るめへ」とヒヨイツと人間の間、愚痴から迷が出て、身体が癒すまいか知らんと思ひました所から、死ぬ氣に成りました、俗に之れを死神が取着いたとか申して、勘アア生きて腰でも抜けて生涯塞に成つて人の厄介になる位ゐるから、寧ろそのと死んで仕舞ふが勝だ」と死ぬ



屋旅籠屋をして居りますが、その美濃由の宅に宿って居り  
 ましたので、朝起きて食事も済まし、最う立たうと荷作杯を  
 他の者にさせ、自分には便所にでも行く積りか裏へ出ますと、  
 籠の中に猫が荒縄で確かりとふん縛られて這入って居ります  
 る、最う啼く聲も發ぬやうに喰れて仕舞って、ニヤア〜と  
 啼いて居ります、所がこの勘太郎は、至って生物の好きな  
 男で、勘ア、畜生、ふん縛られて恐ろしい目に遭って居やアが  
 ると、籠の中を覗いて居る、此時臺處口に襪を掛けて庖丁を  
 持つて居たのは、美濃屋の主人です「關取、その猫の側へ寄  
 りなさんナ、その畜生は怪けるから寄りなさんナ勘ア……  
 これ、旦那、子供欺見たやうな事をお言ひなさる、猫が怪け  
 ると云ふ話は、時々講釋で聞く事だが、猫が怪けたまるも  
 のか由イヤさうでねへ、その畜生ばかりは怪けるから、乃公

助けて伴れて歸つて來た事を、いま手前を助けたこの恩人の  
 勘太郎は、他の爲めに此様な傷を負けて死んで仕舞ふから、  
 乃公の仇敵を討つてよ、好いか、屹度仇敵を討つて呉れよ」ニ  
 ヤー、一寸猫のお話を致しませんと、借この猫が仇敵を討つ  
 といふ、併し前にも述べます通り、開明の今日、余り怪  
 しい事は申上げませんが、人間にしても、又畜生にしても、  
 その恩義と云ふものは、忘れる譯なものではございせん、  
 この勘太郎の宅に居ります斑猫といふのは、丁度この勘太郎  
 が其頃より八年前、五日間相撲を取つて居りました時分に、房州  
 館山と申す所で、五日間相撲の興行がございまして、その五  
 日の相撲を取り上げて、今日の出立をしやうといふ、その宿  
 ッて居た旅籠屋は美濃屋由兵衛と申し、今では歴然とした茶



が今手が隙すいたら殺して仕舞はうと思ふんです勘其りやア  
親方、マア可憐さうに、同じ世界に産いたものだ、人間だッ  
て猫だッて生物です、殺すとは可憐さうだ、併し何か悪い事  
をしましたか由關取、悪い事ッて他ぢやアねへが、此頃膳棚  
が閉ッて居るのに、膳棚の肴が無くあるんです、何うも不  
識でならねへと思ッて居た所が、この畜生の業だ、乃公が蓋  
所で煙草を喫んで居るのを、畜生奴氣が付かないと見ねて、  
肴屋が大きな摺盆の中へ肴を入れて、上から蓋をして置いた  
するとこの畜生奴が出て來やアガッて、摺盆の蓋を開けて、  
肴を唾へ出した、それ儘持ッて行きやアがりやア、まだ優し  
いが、肴を外へ出しやアガッて、蓋を元の通りにして置きや  
アガッた、然うして肴を唾へて此畜生奴出掛けて行きやアが  
るんです、サア乃公は氣分が悪くなつたんです、蓋がしてあ

ッて、中の肴が無くなるんですから、畢竟乃公が見て居たか  
ら好いが、若し見て居あかつたら、猫が取つた大が取つたと  
は思やアしねへんです、何れ人間が肴を取つたと思ッて、宅  
の奴等を誰ありと疑ふ様な事、何うも人間の爲る様な事をし  
て居やアがる、この猫は怪ける畜生だと思ひますから、いま  
欺して斯うやッてふん縛つたのですが、これから手が隙いた  
ら、畜生をこの出刃庖丁で弄殺にしてやらうと、斯う思ッて  
居るんです勘然うですか親方、其様な事があるとは知らねへ  
が、マア勘辨して遣ッてお呉んなさい、私やア土蓋猫が好き  
なんです、寧ろ旦那、私にこの猫をお呉んなさいませんか由  
お呉んなさいませんかッて怪けるが好いかエ勘ソリヤ宜うと  
さいますとも、私が頂させう由イヤこの土地にさへ居なけ  
りやア、其様な氣味の悪いものを殺したくはねへが、關取、



併しれた前さんの國へでも伴れて行ッて、又ねらいめに遇ッたッて、乃公所へ尻を持ッて来ちやア不可ねへせ勘其りやア大丈夫です、どんな事があッても、高の知れた畜生の爲る業、眞更貴郎の所へ小言を言ひに来るやうな事アございませんか、安ん心して呉んなさいまし」と猫好の勘太郎、件の猫を懐裡に入れ、美濃屋の宅を暇乞をして、若者共々口數重ねて姉ヶ崎へ歸ッて参りました、それから後は可愛がッて、自分の宅に置いてある猫でございませぬ、例令畜生とは云ひながら、我が恩人の命を落とすといふ間際です、側に在ッて、ニヤアめもしませうが、其處は畜生の事です、側在ッて、ニヤアニヤア啼きながら、優しく勘太郎の膝に上ッて居る、そのうちに勘太郎は死なうと云ふ決心でありませぬ、出及庖丁で喉を突いて相果てました、所が畜生奴、勘太郎の突口から出

る血を、ペロ／＼舐めて居る、余り猫の啼聲が變だと思ひながら若者は用達を濟まし、戸外から這入ッて見ると、畜生が大きな聲で病人の側に啼いて居る、何心なく座敷を覗いて見ると、仆れて居る勘太郎の喉から、流れ出る血を舐めて居ります、驚愕いたのは若者です、「イヤ畜生々々」と二夕聲掛けます、嗅かして猫は其儘當家を逃げ出しました跡に子分の者は、熟々見れば右の体たらく、サア何處其處へ人を遣れ、彼處へ人を遣れど、それ／＼子分、或は親戚の者を呼び寄せて死骸を見たが書置一本もございませぬ、何うも仕方がない、これは多分病氣中發狂でもして死んだのだらうと變死の事ですから、只今なら警察、その時分の屯所へ届出る、早々検視の役人も出張、醫者もそれへ出て参り死骸を檢め、全く本人發狂と云ふ事で、之れを非る事に相成りました、そ



頼もなく、長藏の所へ参りますのにも變なものだし、何うしやう知らんと若者の二人連、ブラト歩きながら、丁度横山町の實家の前へ掛つて参りました清お花はな「ハイ清此家が私の宅だ、はな「オヤ然うですか清「マア何時實家へ戻れるか知らん」と何となく我が宅ですから懐しく思ひ、二三遍往つたり來りして居るうちに、門戸がガラトと開いた音が致しました、ハテナと三間ばかり先の蕎麥屋の軒下へ這入つて、清三郎お花は小さく成つて居りますと、左様ならね就枕ささいまし、暇乞を致して出る者があつた、雪駄穿に致して急いで蕎麥屋の前を通つて行く、瓦斯燈の燈火で透かして見ると番頭の利八、只今では柳橋の向ふの大六天といふ所に住居を致してりませんが、上總屋の通番頭でございませ、御當所は何うかは知りませんが、東京では永く勤めまして、最う暖簾でも別けて

第十二回

の時分の事ですから、火葬はなりません、隣村の仙建寺と云ふお寺へ葬りました、然るに寺男の話には、墓場へ猫が來て三日ばかり、勘太郎を埋めた所の土の上に、平伏して啼いて居たと申す事で、これは後に寺男の話でございませ、借これから後と云ふものは、この猫の行方が分りません、何處へ行つたか一向姿も見せないやうに相成りました。

エーお話替つて清三郎、お花の兩人でございませ、木更津から船に乗つて、東京表へ立ち戻りましたが、兩人小網町の行徳河岸に上つたのは、五時少々廻つた時分、側の飲食店で晚餐を済まし旁々して居りまするうちに、最う日はピツたりと暮れました、併し東京表へ戻つても、何處へ行かうといふ倚



賞はうと云ふ時分になると、女房を持たして貰ひ、二年なり三年なり奉公を致しまする、その番頭の利八、篤實な男で、至ッてももの、分る人間でございます、根が斯う云ふ小間物商賣をする位ゐるだから、それ、藝妓屋へ出入を致しまして、随分腹の緊ツた苦勞した男です、夫と見るより清三郎は「ア、利八々々利へエ、誰方でございます清利八私だよ利へエ誰方で……オヤ若旦那ですか清利八、久振で御機嫌宜しう利マア貴郎如何遊ばしました、貴郎の事を言ひ暮らして居りました、マア何しろ貴郎にもお變りがございませんで……」と利八は瓦斯燈の燈火で透かして見ると、若旦那のれ身装も以前に變る、餘り結構なれ身装でもなし、さてはと氣が付きました、たから利マア何時貴郎お歸になりました、一寸御新造さまから承りましたら、上總の東金とやら云ふ所へお出でに成ッて居

なさると云ふ事でした、清利八、實は今し方歸ッて來たよ利マア何しろ往來ではお話もなりません、私方へお出で下さいまし、併しれ一人でございますか清利八マア面目ないけれど、實はお花と云ふのを伴れて、一緒に歸ッて來たのだ利左様でございますかさう云ふ事でございませれば、御一緒にいらッしやいませ」そのうちに片傍の軒下から花も出て参り、薄暖い處で小腰を屈め、蓋かしさうにお肯首をして居ります利マア何しろ入らッしやいませ」と兩人の者を伴れて自分の宅大六天の戸外の所、二間々口にして奥行の深い、格子戸の建ッた家で、女房に下女一人を使ッて居る活計、門口より利八「いま歸ッたよ、下女、ハイ、お歸り遊ばせ」宅内から戸を開ける、利八は兩人を案内して奥室へ這入る、女房は「お歸り遊ばせ、利マア、御本家の若旦那を伴れ申した、女房「オヤさう



でございませうか、マア旦那様、此方へお上り遊ばせ、御機嫌宜しうございませう」清三郎も体裁悪氣に挨拶をして上にあがります、ソレお座蒲團お火鉢と云ふので、何時しる主人の事ですから、疎略なきやう取り扱ふうち、何時宅へ戻つて深くも飲まない酒ですが、一杯位飲ると見なまして、酒肴の支度をしてあります、そこで酒肴を取出して、二人の者に薦めまする、清三郎は今向ふで御飯を喫べて来ました利マア然うでございませうが、一ト口召し喫りまして、姐さん、あなたも遠慮おしにね喫りなさいませ、はな有難うございませう」ね花も何から話をして好いか知らんと傍に扣へて居ります、そのうち清三郎は利八に對ひ、上總の成行きの話を巨細に物語りました、一々利八、聞く度々に胸を驚かす位なる、側に居る女房も「それはマア飛んだ事でございますいたしましたねへ」と話の間々に

は言葉を掛け、始終の物語終つてから、利八は「併し若旦那マア貴郎様お歸りにありまして、います斯うして何處へお行でなさるといふ、當もないと云ふ事では實に困ります、マア併し私が何とでも、好いやうなお話を致しませうから、今晩は私の方で御緩りね就枕なさいませ、夜更けて、何うお話をするにも仕方ございませんから、何れ明朝また何とかが私が勘考いたしますから、御心配なくお就枕なさいませ」大きに兩人も力を得て、これから二階に寐床を敷いて貰つて、二人は二階へ昇つて就枕しました、昨日までとは違つて、今日は我が家來の宅に寐ると思へば、大きに安心でもございませうし、また御酒が廻つても居り、昨夜一ト晩今日一日船で揉まれた事です、その夜は緩り寐込みました、さて利八は翌日の朝に相成つて、下女の松と云ふ者を呼び利松や



上總屋へは出入を致し、いまの上總屋の清左衛門に、大變に世話に成つて居ります。先づ春先にでも成りまして、チヨイと金の入るやうな事が出来たと云へば、何時上總屋を頼ひ申し、又は喧嘩口論でも致し、和解の時に錢が入る、金が要るといふ際は、何時この上總屋から、それだけの事をし貰ひます、謂は、上總屋が第一のお得意でございませ、ごんな御用があつても、他の事は捨て、置いて、上總屋さんの御用なれば、自分申すに及ばず、子分の者まで勤めなければならぬといふ、この長五郎といふ仁は、商賣柄で至つて粗暴な人間ですが、腹の清いな男です、物を半分云やア半分づゝ、正直な者ですから、折に触れると怒る事があります、併し随分話合の出来る男です、この長五郎を呼びに遣りました、暫し経つと下女の松と同道いたして、利八の宅へやつて参り

下女「ハイ、利八の毒だ、がれ前臺所の事は後にして、横山町へ往つて長五郎さんと呼んで来て呉れないか、下女「畏まりました、利八の頭、鳥渡御相談いたしたい事があるから、お手間を取らせません、チヨイと来てお呉んなさいと言つて、なんなら伴立つて戻つて来て、下女「ハイ、承知いたしました」と下女は、これから長五郎と云ふ消防人足、これは御當所にございませ、い、が、東京には町内に居て出入を致し、年に二度なり三度なり半纏を織いて店方へ出入を致し、これは我が給金と云つて別には貰ひません、けれども些か給金よりも餘計店方から心付をして呉れます、その代り當所で謂は、誓文拂とか、或は婿を貰ひ、又は嫁を貰ふといふ祝儀事杯の時には、この消防人足が門に立つて、往來の雑沓を防ぐといふ、これが皆出入方の者の役でございませ、この長五郎といふのは、平素



ですか、へエー何處でお逢ひなさいました利「そりやア彼の横  
 山町でお目に掛った、で私やア同道してお伴れ申して来た長  
 若旦那を、然うですか、そいつア何しろ私やア既に上總の方  
 へお出でなすつて居らっしゃると云ふ事ハ聞いて居ります、  
 如何おつたかと思つて心配して居たんです、併しお出でに成  
 ッて居るなられ目に掛りませう利「イヤお就枕になつて居るか  
 ら、れ起し申すのは好くない、何途若旦那にお目にかゝつて  
 貰はなくつちやアならぬ、それに就いて一ツお前と私と今日  
 お店へ行つて、若旦那のお詫言をしやうと思ふんですが、一  
 ツ長さん、私の力に成つて呉れる譯には行くまいか長「へエ  
 言と言つてそりやア介意はねへちやアございませんか、旦那  
 が何と言はうと、別にこれが大金でも使つたと云ふぢやアな  
 し、彼れだけの御身代で二百や三百の金を使つたからつて、

ました長「エーれ早うございます利「オウ長五郎さんか長「へエ、  
 エー只今ね松どんを以て、何か御用が有ると言つて、呼びに  
 お寄越しなさいましたか、何でございますか利「一寸お前に話  
 したい事がある、何うか此方へ上つてお呉れ長「御免なさいま  
 し利「マア蒲團をお敷き長「有難うございます、追々お寒くなり  
 ました、最う時候だから……利「時に長さん、呼びに遣つたの  
 ら他ぢやアないが、チヨイとお前に内々で話したい事がある  
 のだ長「へエ、改まつて何だか知りませんけれども、御店と云  
 ひ貴郎様と云ひ、モウ年中お世話に成つて居ります私、どん  
 な御用でございますか、私の身に叶ひます事なら、と言ふと  
 大きなお話のやうではございしますが、何なりと何うぞ仰しや  
 ッて下さいますし利「イヤ他ぢやアないが、昨夜私やア若旦那に  
 お目にかゝつたよ長「へエッ、上總屋のですか利「然うよ長「然う



私共の懐中にして見りやア、二百文か三百文の端錢を使つたやうなもの、其れを勘當だの滑つたのつて、私共のやうな人足で今の時節と違つて、法律なんでものは知らねへが、昔しは勘當と云ふものが出来たさうですが、今は勘當と云ふものは出来ねへと云ふ事を聞いて居ります、謂はゞ若旦那が柔和しいからだ、私共なら何も勘當しやうが何うしやうが乃公所の宅だ、窓の灰までも皆な乃公が使つても介意はねへと言つて、店先へ坐つて怒鳴つたからと云つても、別段に縛つて罽察へ突出すと云ふ譯にも行かねへもの、マア番頭さんの前だが、謂はゞ話しやア其様なものではございませんか利サアマア話は然うだけれども、長さん、何か言ふと直にね前は其れを云ひ出すから困る、マア其様な事を言はねへで、何卒私の方成つて行つて貰ひたいものだ、長宜しうございませ、其り

やアナニ介意ひません、ね供いたします利其れに就いて若旦那様お一人なら、そりやア介意ひもしなからう、なんば怒つて居らつしやつても御親子の間柄だから、そりやア介意はなからうが、實は花さんと云ふのと御一緒に宅へ入れて頂きたいと云ふ様な私も精神だ、お二人さんもお若い身体、上總邊へ行つて苦勞をなすつたお身だに依つて、眞更生木を割くと云ふ譯には、長さんの前だが行かないやうおものぢやアねへか長御有理でございます、利それだから私やアお店へお詫言に行たいと斯う思ふんだ、何方にしろ最う若旦那様もお嫁御を貰はなからやアならねへと云ふ時分ではあるし、謂はゞお氣に入らない者を、無理に女房にお持ちなさいとお勧め申した處で、これが十日や十五日なら辛抱も出来やうが、一生運添ふ女房のと、これから後五十年一緒に居るやうが、六十



年一緒に居るやら分らないのに、お氣に入らない者を、お側に置くに云ふ譯にも行くまい、ねへ長さん、何う云ふお方にした處が、随分卑しい者を落籍して女房にあさるお仁も、御立派な家に間々ある事だ、強ち淺草の茶店の女だからと言つて、さう卑しめた譯なものでないから、私も昨夜が初めてあるけれど、一寸そのお花さんといふ仁の御容子を見受けた處が、中々何うして上総屋さんのお嫁御だと言つても、かしくないお方だから、私が纏めて談合をしたいと思ふが、長さん如何だらう長エ、宜うございます、其りやモウ當前の事でございます、彼様な事つてものは、別れる話やア極可厭なものです、けれども纏める話だ、結構な話です、貴郎のお供を致しませう、若し旦那が愚圖々々言ふ様な事があれば、その時やア私が一ツ腕捲でもして旦那にね掛合ひ申しませう

利其様なまた噓嘩だど困ります、何うか一ツ大人しくお話を願ふより他に仕方がない、それぢやア長さん、お前御飯は……長へエ最う喫つて來ました、一緒に行きませう」ど此處で利八も支度を致して、鰯の頭の長五郎と同道にて、横山町のお店へと出掛けて參ります。

第十三回

長五郎同道にて番頭利八は上総屋の戶外より利「お早う 若者「お早う、お早うございませう」と皆店の者も通番頭の利八が來たと、それト挨拶を致します、續いて這入つた長五郎「エ、皆さんお早うございます、若者「オヤ長さん、大層早いねへ長へエ平時と違つて、少と今日は早く起たんです、若者「マア此方へれ上り長へエ、御免なさいませし」店の火鉢の所へ來て、長



五郎は坐ッて煙草を喫んで居ります、利八は若者に對ひまして利旦那様は」と尋ますると若最う先程お目覺で、只今御飯を召し喫ッてるやうです利「然うか」其儘長五郎を伴れて奥室へ道入りします、清左衛門は御膳を喫べて膳を退かせ、いま煙草を喫んで居る所へ利「エ、旦那さま、お早うございます清左衛門」オウ利八か、早いナ、マア此方へお道入り利「御免下さいまし清左衛門」誰だエ其處に居るの、長「エ、長五郎でございます、清左衛門、さうか長公か、此方へお道入りナ、長「御免下さいまし、お早うございます、清左衛門」ア、大層早いナ、何か長公の用で利八お出でか利「エ、長五郎の用でございませぬ、一寸旦那に折入ッてお願ひがございまして、長五郎を伴れて出ました、私一人では申上げ悪い事で、清左衛門様か、長公、此方へお出で、長「御免下さいまし、清左衛門」コ、リや誰か居るか、茶を持ッて来て遣りナ、長「エ、

「エ、有難うございます、何うぞれ介意ひ下さいませナ」そのうち茶杯をそれへ持ッて出る、清左衛門「何だエ利八、改まッて長公を伴れて来たッて、何う云ふ事だ利「エ……オ、長五郎さん、長「へ、エ、利「マアお前から話をしてお呉れ、長「冗談言ッちやア不可ませぬ、お前さんと私と年齢が違ふ、お前さんは年若だ、れ前さんから一ツ發言に鳥渡やッて下さいまし利「サアそれだから私がお前を伴れて来たんだ、長「イ、エ、小ぢやア口不調法でございますから、違損ふと困ります、マアお前さんから、清左衛門は之れを聞いて、何だ兩人、其様なに言ひ誤さうに、何う云ふ事だか遠慮あしに話したら如何だ利「ア、左様でございますなら利八より申上げます、實は若旦那様の事でございまして、夜前一寸旅からお歸りになつたと云ふ事で、手前若旦那をお見受け申しました、そのれ話に付きまして、何時まで



るんでもない、たつた一人の伴清三郎に遣るのだ、余は最う  
 疾より勤辨して遣りたいとは思つて居るけれども、夫れも親  
 の方から、最う勤辨して遣ると云ふ事は言ひ悪い、と云ふの  
 は、世間体もあるし、御近邊様にもマア私も面目ないから、  
 其故勤辨をせず斯うして打捨つといたのだ、マアね前方が  
 口を利く事なら、其りやア清三郎一人、宅へ入れます事は何  
 でもないのだ、何とか彼れにも言ひ聞かして、趣意柄を一つ  
 着けて、さうして宅へ入れるとしませう、お前方や長五郎の  
 親切を無にするると云ふ譯にも行くまいから利へエ……其事  
 なら長い短かいを言はいで私承知して居ります利所で  
 さいまして、その一寸申し悪うございますが、何うか若旦那  
 御一人と云ふ譯にも参りません事で、長公長へエ利乃公には  
 かり云はして居て困るぢやアないか、此處まで旦那様にお

若旦那様も家出を遊ばして居ても、マア好い事はお見習ひ遊  
 ばすやうなとは滅多にございませぬし、また其様な事がご  
 さいましたら、手前共始め皆奉公人の心配一ト方ならぬ事で  
 ございます、御立腹の所もございませうが、何うかこれは一  
 ツ御勤辨を願ひたいと心得まして、マア利八が斯様申しては  
 恐れ入りますが、御親類様や何かへお話を申上げた處が、物  
 が大業に成つてなりませず、また中にはさうでもなく若旦那  
 の事を悪く申上げるやうな、御親類のお方もないでござい  
 ません、其様な事がございましては、段々旦那様に御立腹を  
 おさせ申し、何時しかお詔言の濟む様な事がないと心得まし  
 て、實口不備法の長五郎を伴れて、出ました様な事で、如何  
 でございませうか、清左其りやア利八、そんなに腹が立たうが  
 小言を云はうが親子の中だ、私だとして上總屋の身上を膝に遣



日には、なにも番頭さんや私や大きな野郎が二人も来て、  
肯首をしてお願ひ申しは致しません、さうぢやアございませ  
んか、マア番頭さんの前だが、話合なんてエものは大抵早分  
りのした方が好いちやアございませんか、清左「其りやア長公  
貴様の言ふ所、私の思ふ所とは大變に相違して居るやうに思  
ふ長へエ何故でございます、清左「何故と言つたつて、熟考へ  
て見なさい、そりやア清三郎の氣に入つた女の事だに依つて  
私が見なさい、嫁に成るのだから、本人の氣に入つた者があれ  
ば貰ひたいけれども、入られないうだ、云ふのは、お花と云ふ  
者の母親は、眞實の母ではないさうだが、幼少の頃から貰つ  
て育つて、謂はれその家の養女に彼の娘も行つた者だらう、  
その阿母は、蕪草の確か馬道近邊とやら、私も確かりは知らぬ  
けれども、甚だ品行の宜しくない者だと、おにか容子は知らぬ

話をしたものだから、お前から申上げてお呉れ長へエ、エー  
旦那様、さて替合ひまして……清左「何だ落語家見たやうに改  
まッて長實ア番頭さんがいふ通り通りの譯でございまして、  
一人ならお前さんの息子をお前さんの宅へ入れるのだから、  
常前です、お氣に入りの花さんと云ふのを、一緒に宅へ入  
れてお貰ひ申したいといふ、私共のお願ひなんです、マア改  
めて箱提燈を點けて嫁と云ふ日にやア、御親類の前へ對し  
て濟みますまいが、其りやア一年が半年でも、上女中と云ふ  
様な事にでもしますか、マア妾と云ふ様な事にでもしたら、  
世間体も悪くございませうから、何とでも其處は名を付けて  
お宅にお置きに成つて居るうちに女の心底を篤と見届け、そ  
れから、確かな者だと思ひましたら、其上貴郎から御親類へ  
話をなさつたら如何でございませぬ、若旦那一人宅に入れる



せも中々其様な事は出来さうな事がない、それで私やア尙し  
 清三郎が戻つて来たなら、何う成るだらうと思つて案じて居る  
 位ゐると、私ばかりの心配ではない、家内も清三郎が出たそ  
 れからと云ふものは、始終その事を苦勞にして、知つての通  
 り氷の疾病、その位ゐる親に心配を掛ける清三郎、憎い奴と  
 思へども、サア其處が親子の中、その養母と花と手が切れ  
 て居ないうちは、何うも宅へ入れる譯に行かないのだ、マ  
 ア二人ながら能く胸に手を置いて思案をして御覽、言はれて  
 利八、長五郎一言もございませぬ、暫く黙止つて差俯向いて  
 居りましたが、そのうち唐紙を開けて清左衛門の女房病中な  
 がら蒲團の上から妻、オウ利八お出で、長五郎、能く来て呉れ  
 たね、長へエ、これは御新さん、餘り次の室で大きな聲を出  
 しまして御免下さいませ、妻、イエ、最う妾も先刻から聞いて居

ぬが、何うも宅で博賭などの宿をしたり、女でこそあれマア  
 一遍ぐらゐるは、暗い所へも這入つたと云ふ様な噂を私やア聞  
 いて居ります、お前方は私を何にも知らぬと思つて居なさる  
 だらうが、私は無に淺草界隈に往つて、始終さう云ふ事は最  
 う聞き正して居ります、先方の心慮を探つて見ると、さうで  
 娘を伴つて逃げた清三郎、晩かれ早かれ東京へ歸つて来るだ  
 らう、その時やア上總屋の店へ坐り込んで、大金にしなけれ  
 ばならぬといふ、斯う言つて居ると云ふ話、其様なマア阿母の  
 ある女を宅へ入れて御覽、臺に上總屋の暖簾に瑕が付く、そ  
 れだに依つて花と云ふ女の宅へ入れる事は出来ないのだ、  
 それともお前方二人で、そのお花の母親から、親子の縁を切  
 ったといふ、證據でも貰つて来るならば、そりやマア私の事  
 だ、一も二も言はずに、立派に清三郎の嫁に致します、けれ



りました、旦那様の言葉御有理な事でございます、可愛い  
悴の嫁だから、妾も其娘を宅へ入れて遣りたいと思つたが、何  
うかれ前方二人で骨を折つて、本人同士を一緒にしてやつて  
呉れるといふ心があるなら、淺草のお花と云ふ者の母親  
と親子の縁を切らす事にはならなからうか、長五郎どんも  
のだらうねへ長、ハイ、御有理でございます、暫時長五郎は又  
手をして考へて居ましたが、本人も年中お世話に相成るお店  
のと、若旦那の御一身上、こいつア一ツ思案をせにやアなら  
ねへど、暫時腕を振いて思案に暮れて居りました、何を思  
つたか長、イヤ宜うございませう、こいつア一ツ私が掛合ひに往  
きませう、下手な代言でも頼んだら、鏡ばかり取りやアがッ  
て、その話の追付かねへ事があつたら詰りませんから、私が  
一ツ掛合ひに往きませう、清左長公、お前掛合ひに往くと云ッ

て、先方がさう云ふ女だから、れ前の手では難しからうよ長、  
冗談言つちやア不可ません、高が知れた女でございませう、半  
へ這入らうが懲役に行かうが、其様お事を怖がつて居るやう  
なとで、掛合ひが出来するものか、私だつて一ツ間違やア  
火の中へ飛び込む家業して居るんでございませう、生意氣な事  
を言ふやうだが、人は一代名は未代、人間は死んで名を存す  
虎は死んで皮をのこす、狸は死んで皮を襟巻にのこします、清左  
下らねへ事を言ふあエ長、然うぢやアございませんか、名の存  
るこつてございませう、イヤ私が掛合ひに往きませう……。

第十四回

長餅し無料ぢやア話が出来ません、そりやア先方も幾歳から  
賞つて育てたのか知りませんが、人一人前に成るやうにして、



すつて下さいまし、清「それで、利八、御苦勞ですが長公と一緒に  
 行つてやつてお呉れ、金子は愛に二百圓あるから、此金を  
 持つて行つて、其金で足りなければ、また何うなと好いやう  
 に話をして来てお呉れ、利承知いたしました」金子を受取つて、  
 之れを懐中に入れて利八「長五郎は「ちやア御新造様、行つ  
 て来ます、旦那、行つて参ります、清「それでは長公、頼みます  
 よ、長「畏まりました」と二人は上総屋の宅をば立つて出まして、  
 彼の眼鏡橋を渡つて、藏前通へ掛つて来る利「長さん、長「へ、利  
 何う云ふ掛合をする胸算だ、長「い、何うも斯うもございませぬ、  
 一ツ掛合は臨機應變で遣付ける胸算でございませぬ、いよ、  
 行かなければ、婆ア一人位、エ、小哥哥やア打殺して仕舞ひます  
 から、利「其様な事をしちやア困るせ、お前は好からうが、乃公が  
 困る長「ナア、ニ、大丈夫だ、事が始まつたら先へ歸つてお呉んな

その婆ア奴、これから娘で錢を取らうと云ふ所を、玉がなく  
 なつて仕舞つたのですから、そりやア少とは金を遣らなくッ  
 ちやア濟みますまい、清「それはお前が言ふ迄もない、親子の縁  
 さへ切れば、金の二百や三百は出さうから……長「ナア、其様  
 かに要りやアしません、善は急げといふから、それぢやアこ  
 れから行つて話をしませう、清「長公、マアさう急に往くといふが  
 好いか、エ、長「エ、大丈夫でございませぬ、番頭さん、お前さん何  
 うぞ一緒に行つてお呉んなさいまし、金はお前さん預つて、  
 旦那、マア百圓ばかり番頭さんに渡してやつてお呉んなさい  
 まし、清「それで好いか、エ、長「エ、大丈夫でございませぬ、清「併しなが  
 ら長公、御時節柄だから、昔しの事を思つちやア不可ないよ  
 長「エ、其様な事は御心配なさいませぬ、眞更長五郎も上総屋  
 様のれ名前を汚す様な事は致しませんから、どうぞ御安心な



開けて、介意はないから、れ這入り利御免をさいますし、二人は表の戸を開けて、宅内に這入り様子を見ると、其處等に酒の道具や何かを取り散してあります。とら「サア遠慮なしに此方へ上ツて下さい。兩人御免下さいませ。」二人は上にあがって、長五郎は吠煙草入を取り出して、真鍮の大きい煙管に煙草を詰めて、一服飲んで居る。番頭の利八は「長さん、一ツお話をして呉れたら如何だ。長マア前さんから初發に、話をなすつたら如何です。利それぢやア私に話をしやう、時にお處さん、とら「ハイ、利他ぢやアをさいますせんが、私やア兩國横山町の総屋の手代でございまして、利八と申します。とら「ハイ、左様でございしますか、これは、マア初めてお目に懸ります。妾はお虎と申します、何卒將來はお心安く願ひます。利就さまして手前共の若主人が、とら「やうやう貴女のお娘御と、別なき中

さいまし、私は後へ残つて、どんな奴が來ても、一ツ腕力で掛合つて仕舞ひますからと途中での話し、利八も大きに長五郎の家業が斯ういふ家業だから、心配をしなから、雖も淺草の浅草寺觀音の背後なる、彼の富士横町へやつて参りました。前回にも申し上げました如く、このお花の母親と云ふ者は、至ッて品行の悪い奴で、此頃は最う自棄酒といふので、長屋の者が何と言はうが、宅の道具を賣拂ひ、れ花の歸るまで、食糞いで居れば、何うかなるといふので、朝から酒を飲つて、眼の縁を赤くして、管を巻いて居ります。二三間此方の旅籠屋の宅で、様子を見て見ると、お虎の宅は彼處だと教へて呉れましたから、雖も利八、長五郎の兩名は、れ虎の宅の門口へ來て利御免下さいませ。とら「ハイ、誰方利「エー、一寸兩國から参りました。とら「ハア、マア此方へ這入つて下さい、その戸を



上総屋さんの方ぢやア妻を嫌って、親子の縁を切つて呉れど  
 斯う言ふのかね利「エーマア然う云ふやうな話でございます  
 御立腹では恐れ入ります」と「ナアニお前さん、腹も何も立ち  
 やアしませせん、彼の娘だつて、九ツの歳から妾が貰つて育て  
 たんだ、御維新に變る前から、彼の餓鬼を丹精して成育して  
 今になつて親子の縁を切つて呉れど、其様な事を吐す娘だも  
 の、妾だつて恃憑に思つて居やアしない、イヤ如何にも親子  
 の縁を切りませう、その代りお氣の毒だが無料ぢやア否です  
 よ利「そりやア御有理さまでございます、其處は何うか、貴女  
 さまに御幼少の時分から、御本人も御恩を受けて居まするも  
 のですから、養育料と云ふやうなことで、何とか穩便にお話を  
 願ひたいやうに心得ます」と「ハイ、其りやア妻だつて大  
 さな事は言やアしないけれども、相手が上総屋さんどあつて

になつたと云ふ事を聞きました、疾より家出を致して居り  
 ます、それに就きまして本人同士も別れたくない様な事で、  
 今度一ツに致しませうといふ手前共の心得でございます、只  
 今直に上総屋の宅へ、お花さんを嫁といふ次第にも参り兼ね  
 ます、其處で半年か一年の間は、マア何れ親類に告知をする  
 譯にもなりませんから、その間は、何處へか預けていも置かな  
 ければなりませんので、就きましてはお虎さん、斯う申して  
 は恐れ入りますが、淺草の茶店にでも出てお在でなすつたど  
 いふ貴女の事でございますから、何うか此所を暫く親でない  
 子でないと云ふ事に、一ツれ話を致したいと云ふ心得で、手  
 前共がお話に参りましたやうな次第、何うか成るやうなれ話  
 を願ひたいやうに心得ます」と「ハ、ア成程、それぢやアなん  
 ですか、早い話が妾はお花の阿母だ、多分品行が悪いから、



見ると……本來なら親子の縁切金、妾もこれから何年生るか  
 知れあいが、彼の娘のれ庇蔭で、年を老ッて樂をしやうと  
 ッて居たんだ、そいつを親子の縁を切れと言ふんだから、  
 ア金の五千圓位エも貰はなけりやアならあいが、其様な大  
 な事も言ひ惜いから、ズツと折けて二千兩お呉んなさい、二  
 千兩なら親子の縁を切らうと、妾がさう言ッてたど、宅へ歸  
 ッて話をしてお呉れ「利エ、ッ……」利八の喫驚いし、呆氣  
 に取られて、お虎婆アの顔を見て居る、長五郎は今まで側に  
 黙止ッて、胭脂下に煙管を啣へ、煙草を喫んで居りましたが  
 ソロ／＼顔の色を變へ、眉毛を釣上げて來ました利長さん、  
 今の話を聞いたかエ長エ、聞きました、オイ老母、オイれ婆  
 さん、オイ婆さん、とら何だよ長何だッて、なにかエ、二千圓  
 呉れと言ふのかエ、とら「サア二千圓貰はなけりやア、親子の縁

は切れないんだよ長「ナニッ馬鹿にしやアがるなエ、この婆  
 ア奴、とら何だ、婆婆ア、妾を垂れねへ奴があるものかエ、な  
 んだエ大きな顔をしやアがッて、二千圓が怖いのかエ、おれ  
 も淺草の富士橋町ぢやアお虎婆さんと言ッたら、生意氣な事  
 を言ふやうだが、この近邊では他にも知られて居るんだ、  
 りながら二千圓が小籠一文飲けても、親子の縁は切らねへよ  
 氣の利いた奴等が二人も出て來やアがッて、二千圓と聞いて  
 喫驚しやアがッたのかエ、二千圓に恐れる様な事なら話やア  
 止めた、トットとお歸り、へッ、へッ長「オイ、婆婆ア、オイ  
 婆婆ア、好い加減にして置け、ムウ乃公ア横山町の長五郎と云  
 ふ者だ、淺草ぢやア手前をこの近邊で他が知ッて居るか知ら  
 ねへが、其様な事は乃公ア分るものかエ、二千圓だ、手前な  
 ざア娘で食はうといふ了箱だから、其様な事を吐すんだ、大



人しく一年と二年の間辛抱して居りやア、乃公ばかりぢやア  
ねへ、番頭の利八つア人も此處に居らア、手前の大人しいの  
を見込みやア、上総屋さんの宅の阿母と言はれるやうにして  
遣らうと、此方も話を大人しく持ち掛けて来たんだ、それに  
二千圓なんて、格外な事を言ふなエ、ぢやア何うでも二千圓  
出せと言ふのか、とらりやア當然の事だ、さうよ二千圓が銀  
一文飲けても承知しねんだ、横山町の長五郎だ、ヘン辰五郎  
も長兵衛もあるものかエ、昔しやア幡隨長兵衛といふのは、  
この花川戸で大層な男だと云ふ事は聞いて居るが、手紙も矢  
張長の字を頭に頂いて居るけれど、ヘン蝶々止りやア菜の葉  
に止るといふ長五郎の長の字が違ふわい、阿童野郎奴、誰だ  
と思つて居るんだ、女でこそあれお虎婆さんだ、ひくともす  
るんぢやアねへや、馬鹿野郎奴、サツサと歸りやアがれ、

前達に話をする口は持たねへから、サツサとお歸り、サアサ  
アれ歸りく、煙管を持つて煙草を輪に吹きながら、二人の  
顔をジイッと睨んで居るお虎、堪り兼ねたか長五郎、行きあ  
り婆アの胸倉を引捉へました、とら「ヤイ、如何しやがるんだ、  
この野郎」と大きな聲を出す長「何うも斯うもあるものか」と  
行きなり頭をボカーリッ打擲る、擲られてお虎は其處へ仰向  
さまに顛倒る、上に馬乗に乗つて咽喉を絞めつけ、頭をボカ  
ーリッく、續けて三ッ四ッ擲倒しました。

第十五回

此時お虎婆アは痛さに堪へ兼ね、大きな聲を發して、とら「誰方  
か来て下さいよーく」と、其處は悪い奴だからと申しても  
女のと、逆も男には叶せせんワイく」と怒鳴つて居る、側で



衛と云ふ仁、門口から宅内を覗いて居たが、何うも不  
 お虎の爲る事が悪いから、長屋の者さへ逃げて居て、誰も宅  
 内へ這入ッて、止めやうと云ふ者もない位ですから、家主も  
 只見て居るばかり、長五郎は「サア如何だ、諾と言ッて包金  
 で承知をするか、否だと言へば打殺して仕舞ふぞ、如何だエ  
 諾と言ふか、サア否か、如何だ」とキウ／＼絞付ける、  
 お虎は「やも、この塩梅ぢやアどうやら殺されさらな工合、  
 し殺されちやア堪らぬと思ひましたから、ア、ウ、ノ、諾  
 と音ひます、萬望マア勘辨してお呉れ……」番頭の利八は之  
 れを聞き利長さん、最う好いちやアねへか、マア待ちねへ」  
 とこれから漸うに長五郎を止め、お虎ばを引き起しました、  
 ばい奴咽喉の所を撫せながら「ア、痛い」と青く成ッ  
 て居ります、長五郎は片肌脱にあッて長「サア如何だエ、いま

番頭の利八は「長さん、マア亂暴い事をしたら、不可ねへせ」  
 と止めやうとして居るが、長五郎中々諾きません、汗をか  
 て「長番頭さん、打捨ッときなさい、これから小哥の本職の掛  
 合が始まるんだ、サア婆ア、何うしても斯しても二千圓より  
 諾と吐しがやアらねへのだナ、此上は長五郎懲役は書入れで  
 来たんだ、汝のやうな悪い奴ア絞殺して仕舞ッて、乃公が一  
 人懲役に成りやア、若旦那もお花さんの身体も安体に横山田  
 のお家で御婚禮が出来ると、サア婆ア、諾と言ッて親子の  
 縁を切るか、それも否だと吐しやア、絞殺して仕舞ふが、如  
 何だ」と上に乗ッて抑へ付ける、婆はヒイ／＼大きき聲を發  
 して居る、うのうら長屋の者はこの聲を聞き付けて、戸外か  
 ら宅内の様子を見て居るが、餘り長五郎の權幕が恐しいの  
 で、誰も宅内へ這入ッて来る者はございませぬ、家生の半



と大きに悦んで長五郎利八も家主長屋の者にも禮を述べて、  
 書付の一本も取り、纏て横山町の上総屋へ立歸つて参りました。  
 た、主人清左衛門にもこの一條を述べますると大きに悦び、  
 遂に假親を致して、お花は更めて上総屋の宅へ嫁入、清三郎  
 の女房と云ふ事に相成りました。借お話が替りまして、上総  
 の東金在の海防村、丁度九月の末の方の事でございしますが、  
 傳次と若者の龜藏と云ふ奴と二人連、一村隔つた吉田村と云  
 ふ所に博賭が出来て、その賭博からの歸途、丁度數際の仙建  
 寺といふ寺の傍手へ來掛りました。此時傳次は大道で小便を  
 して居りました。子分の龜藏は「オイ兄イ、傳次何だニ龜藏  
 をして居るんだニ傳次少し待って呉れ、乃公ア小便をして行く  
 んだ、手前も關東の連小便と云ふ事があるから、一所にして  
 行け龜藏冗談言ひなさんナ、なんば附合が好いからと言つて、

吐しやアがツた通りなら、包金で縁を切るか、とら「ハイ、縁を  
 切ります、妾も若いうちから、随分亂暴な人にも出逢つた事  
 があるが、お前見たやうな仁に出逢つたのは初めてだ、また  
 御近邊の人も見えて居ないで、道入つて止めて呉れたら如何だ  
 エ、眞個にこの近所の奴等ア、不人情な奴ばかり揃つて居る」  
 長屋の連中は、戸外に立ッて見て居りましたが、如何です  
 吉兵衛さん、時節が變ると色々な事になるんですねへ、應對  
 も口で行かねへど、腕力になつて來た、この晦日にやア一ッ  
 掛取が來たら、來月まで待ッて呉れ、待たねへど吐したら、  
 今の傳で遣付けたらどんなものだらう、さうしたら來月まで  
 待ちませう、杯と、長屋の者は戸外でワイ／＼と話をして居  
 りまする、其處で家主に渡ッて、親子の縁切金といふので、  
 三十圓の金を出して、これでもア婆アの方の手を切ッて重盛



二人の死骸を引取り、海防村に沙汰を致し、相成りませしが、  
 隣の村の死骸を引取り、海防村に沙汰を致し、相成りませしが、  
 やら、物所業であらうといふので、傷日萬端査めの上、直  
 なし、中には咬取つた處もあれば、引掻いた處もあり、何う  
 いたしまして、死骸を取調べましたか、何うも切つた疵では  
 警部、巡査、楠上裁判官、警察付の醫者、杯、皆々其處へ出張  
 屯所と云ふ時分の事で、到頭之れを届ける事に相成りました  
 から、早々に姉ヶ崎、未だこの時分の警察とは申しません、  
 方大勢年寄衆も集つて来て、この死骸を棄て、は置かせん  
 住持も出掛けて参り、ソレツと言ふので、村方へ知らせる、サア  
 の所を掃除に廻つて見ると、血の塊が散れて居る、片傍には  
 二人の死骸があり、早速此段を役僧にも話をした、サア  
 二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

小便の附合までは出来ねへや、傳この野郎、餘程薄情野郎だせ  
 龜元談言ツちやア不可ねへや、小便をしねへッて薄情なんて  
 言はれて堪るものか、と、二人は話をして居る途端に、數際  
 にてガサ、ガサといふ音がする、ハテナと傳次は振仰向い  
 た途端に、バツと飛び着いた怪しの物、何か真体は分りませ  
 んが、行きなり傳次の咽元を目掛けて、ガブリ咬ひ着きまし  
 た傳「ウツ」と云ふ一聲、此聲に龜藏は「兄、如何した  
 した」返事が無いから、龜藏は二三間退後をして來る途端に  
 又候龜藏の鼻面へガバと飛び着いて來た龜「ウツ」と龜藏に  
 も其處へ倒れる、何物の業とも分りませんが、到頭傳次も其  
 處で狂死、龜藏も同じく咽喉から顔から胸まで、引掻いた疵  
 と咬付いた傷で二人は其處へ斃れて仕舞ひました、借て此の  
 騒動のあつたといふ事は、其時は誰も知る者はございません



んだか分らねへが、併し可愛さうな事をしたなア」と打萎れ  
 て音五郎は子分の奴等三人を相手に話をして居ると、二階で  
 ミシリ／＼と音が致します音「大ヤ、オイ……」△「へエ音二階を  
 鎖めたかエ△「エ、閉めました、日暮にチャンと鎖めて置きま  
 した音鎖めた△「エ、音エ、ぢやアねへ眞實に閉めて置いたか  
 △「エ、大丈夫でございます、起きて居るうちに、正歛盗人の  
 運入るやうな事もありまますまい音「サアそりやア盗人が這入ッ  
 たッて、滅多に取られる物は無へから大太夫だ○親分然うで  
 もありませんせ、一寸此頃間が好いッて事を、此處で話をし  
 て可はずから、ヒヨツとする盗人が這入ッたかも知れませ  
 んせ音馬鹿言へ、下で話をして居るのに、正歛二階から盗人  
 も来やアしめへど、何だか不審さうに話して居りまする、折  
 しも恐ろしい物音が致して、階段を降りて来る物がある「ハ

何物に殺されたとも、一向分らずじまひ、處が森に丁度この  
 兩人の初七日の晩の事でございませすが晝間は坊主を頼んで志  
 の佛事もして遣り、その晩方に成りまして、精進物だが若者  
 にも酒を飲まし、己れも心持よく酒を飲んで居りましたが、  
 彼れ此れ十時でもあらういふ時分、奥室に寢床を敷かして寢  
 やうと致しましたたが、今日は丁度傳次、龜藏の初七日の事で  
 あるといふので何となく宅も陰々致して居ります「ナア夢  
 のやうな氣がするなア」と子分の者は話をしながら○全体傳  
 次兄イ杯は何に殺されたらう△「サア乃公ア考へて見ると、何  
 うも狼だよ○馬鹿ア吐せ、こんな所に狼が居てたまるものか  
 △「さうか、狼でもあけりやア彼様な殺し方アしねへせ●乃公  
 ア山犬かと思ふナ音馬鹿ア言へ、アノ胸から顔へ掻けて、如  
 彼云ふ爪形が這入ッて居る所を見ると、何うも何に殺された



「不思議だナ」と子分の新蔵ッて奴が、斯う上を見上げると宛も恐ろしき両眼の光、金色を致して二ッ列んであるのが、歪で宵の明星見たやうな光、階段の下から見上げる新蔵「イヤーッ」と言ふ聲を掛けた途端に、上から降りて来て、新蔵の目と鼻の間を隔んでバツと飛び着きました新「キャーッ」と言ふ、そのうち音五郎、傍に在った煙草盆を取って、ボカリッ怪物に投着けた、すると怪物の方が早かったか、サツと体を轉じるや否や、ッ、ッ、ッ、音五郎に飛び着いて来て、肩の邊へ一ッ咬着きました、流石は音五郎、汝ッと言ひさま握拳を固めてボカリッ一ッ拗倒した、敵手も打たれたものですから、キヤッと言ふ聲を發げた、そのうち奥室へ飛び込んできた音五郎、籠篋の抽斗に手を掛け、用意の脇差を取り出さうとする間に、彼の獸物は飛び込んで来て、音五郎の襟首

第十六回

の處へガブツと咬着きました音「ム、……」と仰向に倒れた音五郎の咽元を臨んで咬ひ着いた、何ぞ堪りませうや、其儘籠篋の前音五郎は驚れて仕舞ひました。

子分二人の者はこの様子を見て、戸外へ飛び出さうと致しました、戸鎖がしてあるので、鑰を外さうと思つても、扉を叩いて居りますから急に外れません、人殺だ！と大聲を發げて居る、怪物はそのうち音五郎を咬殺して、其儘表の方へ飛び出して参り、いま出やうとして居る子分二人へ飛び着きました、二人共逃げても退くも出来ればこそ、到頭その怪物の爲めに、此處にて咬着かれ、或は足の下を引掻かれ、その殺された態は、實に目も當てられぬ程の始末、儲その聲が近



誰もこれだけの騒動のあつた事知らず、所がその翌朝と相成りまして、音五郎の宅は戸が閉つた儘で起きもしない八時過ぎ九時十時十一時にも成りますのに表戸が開きませんから、其處で村の者も不思議に思ひまして、歩使の喜兵衛といふ者「親方々々、最う十一時だ、親方々々、コレハ何と言つても返事をしねへが、どういふものだらう」不思議ながら表の戸を開けやうと思つたが、中々開きません、其處へ三人野田上をして戻つて来た百姓衆「音五郎の宅は未だに戸が開かねへ、昨夜大エ聲をして、人殺々々怒鳴つて居たのは、乃公も聞いて居たヤア、汝も聞いたか」オウ乃公も聞いた△△それに今朝に成つて、戸が開かねへといふは、何うも不思議な事だ、マア一遍戸を開けて見べエ」と歩使の喜兵衛並びに百姓二三名の者は、鍬の柄で表の戸をドン／＼叩き始め

邊へ聞ゆるも致しましたらうけれども、何がさて不圖から評判の悪い音五郎の類の事もある「また何か音五郎の宅で、喧嘩ベエ始めやアかつたらう」ナアニ彼の野郎、彼様な悪い奴だから、こんな事があつても好い、打捨ツとけ」と近邊の百姓衆人殺の聲を聞いても出て参りません、これが同じ事でも火事事でも言つたら自分の宅が焼けては堪らぬといふので、それは水の一杯位は、持つて出も致しませうが、人殺と言ふんだから、彼處の宅では殺されやうが、乃公の宅の方さへ何ともなければ、それで好いと、遂に誰も近所の者を出て参りませず、勿論これが其後にも大きな聲でもして、ワイ／＼騒ぎ立てましたならば、そりやア提燈でも持つて出て参りませうけれど、何しろそれ限り音沙汰がございせんから、邊でも其儘に事の濟んだと思ひ寝て仕舞ひましたか、一向近



入るのも氣味が悪いから、戸外の所に篝火を焚いて、宅内は  
 上端の所から、奥室の方へ洋燈を點けて明るくして、戸外に  
 は床机を置いて、それに勝正利といふ巡査が一名番を致して  
 居りました、村の者もそれに附いて今夜は何途番をしなけれ  
 ばならぬと、宵のうちには色々話もして居りましたが、丁度十  
 二時過ぎ、彼れ此れ一時とも思ふ時分、百姓の伴作と云ふ者が  
 何氣なしに奥室の方を、斯う怖いもの見たさに覗いて居りま  
 した、すると算笥の前の所に驚れて居る音五郎の死骸が、南  
 枕の奴がヒョイツと斯う北枕に寐返りを致しました、伴作奴大  
 きな聲を發して「ウワァ」と言ふ、他の者は肝を潰して○  
 コレ何で大ニ聲を發しやアかるんだ、この野郎、マア魂消た  
 ず、突然に大ニ聲を發しやアがッたんだ、何だッて、また其様な  
 順逆な大ニ聲を發しやアがッたんだ、御役人様も此處に居る

ました、漸く一枚の戸が外れた、其處で宅内へ這入ッて「親  
 方々々」と聲を掛けながら、上端の所を見ると、土間の所に  
 一人、上端の障子の所に一人、カラモウ目でわらうが鼻であ  
 らうが引搔散らして、咽元の邊を咬取られて踏れて居ります  
 この体を見るなり「イヤァッ、ソレ人殺だァッ」と言ッて大  
 騒ぎを致しますので、この聲に近邊の者も大集集ッて参りま  
 した、夜分と違ッて晝間の事、早速この返事を姉ヶ崎へ届出  
 せました、早々に姉ヶ崎の役人衆、それ／＼出張を致しまし  
 た、けれども之れを屈けて行く時分は、最う彼れ此れ二時と  
 いふ頃は、向ふから役人衆が御出張に成ッたのは、最う五  
 時下り、死骸萬端檢視立合ひの上で査めました、最う燈火  
 の照く時分の事ではありませぬし、この死骸を今夜のうちに  
 取片付けるといふにも入足はなし、村の者が六七人宅内に這



ぢやアねへか、それ見る、御役人様も喫驚なさつてたぞ、伴  
れだつて大ニ聲しなけりやアなんねへ事があるだ、○「ナニ如何  
したのだ、伴見ろ、音五郎の死骸が寐返をしたぞ、○馬鹿も事を  
吐せ、この野郎、怪物屋敷ぢやア、あるめへし音五郎親分の  
死骸が寐返なんぞして堪るか、死んだ者が寐返りするなんて  
昔しから聞いた事はねへぞ、伴、それでも怪物屋敷も同じ事だぞ  
此間も此間で裁蔭の仙建寺で此處の宅の子分が殺れさた、其  
時も同じ事だぞ、死屍の態ア見た處が、コレ何うも何か咬ッ  
たやうに傷を負ひてゐるだ、けんども分らねへだ、△この野郎、  
また詰らねへ事を言ひ出しやアがッて、他に心配を懸ける、  
其様な事があつて堪るものか、伴アレエあるかねへか見てたら  
分るわ、○見て居るッて如何見て居るだ、伴死骸の方を見てる、  
そのうちにまた動くぞ、△其様な事があるものか、と一人言ひ

二人言ひ、怖々ながら二三名の者、奥室の方を眺めて居りま  
した、が、別に何の仔細もございませぬ、稍暫時経つと、今度  
は音五郎の左の方の手を斯う上げて、其手が斯う二三遍手招  
を致しました、サア百姓奴驚きやアがッて、「ウソッ」死屍  
が招いた、ソレ死屍が呼んだ、とソイ、立騒ぐ、此時床机  
を離れて逃げ出さうとして、端に腰を掛けて居た奴が突然に  
起つたものですから、床机の端の方に居た奴は顛倒る、イヤ  
土瓶は顛倒すわ、茶碗は轉げるわといふ騒動、この騒動に巡  
査勝正利も、何うも變な事のありさうな理はないがと、奥室  
を脇目も觸らず致して、ソイツと眺めて居りますと、其時  
は何事もございませぬでしたが、暫時経つと臺所の死屍がヒ  
ヨイツと斯う座つた正ハテナ、妙な事があればあるもの、と  
視て居るうちに横に斯う寐ました、其處で勝正利は考へまし



て「ハ、アこりやア何か動物の業に相違ない」暫くの間ジイ  
ツと何か考へて居りましたが、纏て靴を脱いで尙も様子を窺  
ひながら、歩使の喜兵衛を呼びまして「何か其方の宅に刀物  
はないか喜一別に何にもござりませぬへが、私宅にやア  
吊差が一本ありますだ正ム、それを此處へ持つて来い」喜兵  
衛は宅へ歸つて、若い時分に穿じた刀、併しその當時り、最  
早刀を穿すといふ譯にも参りませんが、一尺八寸ばかりの道  
中差を一本持つて来て、之れを巡査に渡します、勝は其刀  
を引抜いて、柔と音のしないやうに上へあがって筆筒の右手  
の所の壁、その壁の所へ刀の尖を當てがひて、壁越にダツと  
力量に任せて突貫した、處が壁の向ふでキヤイツといふ叫聲  
ソレツ佳しいと言つて、これから裏手の方へ飛び出す、勿論  
百姓にも吩咐けてありましたから、各自提燈、或は松明のや

うな物を點けて、音五郎の宅の裏手の所、一寸手廣ではあ  
まするし、其處へ廻つて来ると、犬はどはどさつませんけれ  
ども彼れ此れ矮狗より餘ほど大きいと云ふ位な斑猫、襟首  
から咽元へ掛けて突かれたものと見て、ムーンくと唸り  
ながら、猛り狂ふて居ります、所へ勝正利は飛び込み來ッ  
て、滅多斬に斬付けました、敵手も逃げやうどはした、は  
や逃場を失つて、遂には查公に飛び着いて來るのを、尙も滅  
茶々々に斬倒し、到頭刺殺して仕舞ひました、此段を早速屯  
所へも届けます、さう斯うする間に、最う夜場にも間近  
事でもあり、中々百姓のこの騒動に寐ても居られず、村中  
出に成つて、ワイ／＼言つて居りましたが、夜が明けてから  
姉ヶ崎屯所より警部其他の役係、楠上裁判官も其處へ御出張  
になつて、これから大勢の者が寄つて、さてはこれは猫の所



誠まことに上かみでも蓄たくわ生なまながら、感あは心ななものである、猫ねこは恩おんを知らぬ  
 といふけれども、實じつに恩おん人の仇あや討うちを致いたした事ことである、と其その處ところ  
 で先まづづ猫ねこの塚つかといふものを姉あねヶ崎さきに一ひと基もと、同どう村むらの戸と長なが渡わた邊へと  
 いふ仁にんが寄よ進しんを致いたして、立た派はに建た立たいたしました、また巡めぐ査さ  
 勝かつ正せい利りは、此この猫ねこを突つき止とめたといふのは天あま晴はれの働はたらきとて、こ  
 の功こうに依よつて、此このお方かたは後のちに警けい部ぶにまを昇のぼ進しんいたされまし  
 た、然しかるに彼かののれ花はな、清きよ三さん郎らうも、この噂うわさを聞きまして、東とう京きやう  
 より番ばん頭とう利り八はち、頭あたまの長なが五ご郎らう、又または車くるま夫つまの長なが藏ざう、皆みな々々を同どう道だうに  
 て姉あねヶ崎さきへ参まゐり、三さん好こう村むらの與よ吉きちにも厚あつく禮れいを述のべ、勘かん太た郎らうの  
 佛ぶつ事じを營えいみ、且かつつ猫ねこ塚つかの建たちましたといふ話を聞きまして、  
 猫ねこ塚つかに對たいして金かね三十さんじゅう圓げん寄よ附ついたしました、それが爲ために追お々々  
 猫ねこ塚つかも立た派はになり、石いしの玉たま垣かきなども出で來き上あり、今いま日ひに至いたるま  
 で上かみ總そうの東とう金かね在あり、姉あねヶ崎さきに猫ねこ塚つかとて、立た派はに存ぞんりございする

業わざであつたか、餘あま程ほど古い猫ねこだが、何なにでこの猫ねこが此この様ような此この間ま  
 といひ、また昨夜けふ都みやこ合あ六む人にんの殺ころしたのであらうと、實じつに  
 人ひと々は驚おど愕おどいて居ゐります、その中なかに知しる者ものがございまして  
 この猫ねこは姉あねヶ崎さきの勘かん太た郎らうが、平ひら素そ可か愛あがッて居ゐた飼か猫ねこだとい  
 ふ話を致いたす者がございます、また藪やぶ陰かげの仙せん建けん寺じの寺で男おとこの申まをす  
 にも、これにて思おもひ當あたりましたが、先まづ達たて勘かん太た郎らう殿どのが自じ殺ころを  
 して、手て前まへ寺でらの墓はか所ところへ埋うめました、その墓はか場ばの所ところへ來きて此  
 猫ねこが、三さん日にち程ほどもその埋うめた土つちの上うへに乗のッて啼ないて居ゐりました  
 が、さては恩おん人の恩おんを忘わすれず致いたして、この猫ねこが敵あかを討うつたも  
 のと見みなますとの話はなし、處ところが悲かなしいかなその死し骸がいの許もとに居ゐッて  
 その死し屍しに身みを入いれて、身み體たいを動うかしたり何なにかするやうな悪あく  
 戯あそをしたばかりに、巡めぐ査さの爲ために此この處ところに殺ころされましたので、



東金奇聞猫塚の由來も、こゝにいたりまして大尾とあひ成り  
まする

東金奇聞 猫塚の由來終

明治三十年五月一日印刷  
全 年五月六日發行

定價金廿五銭



編輯者兼  
行輯者

大坂市南區末吉橋通四丁目八十六番邸  
大 淵 涉

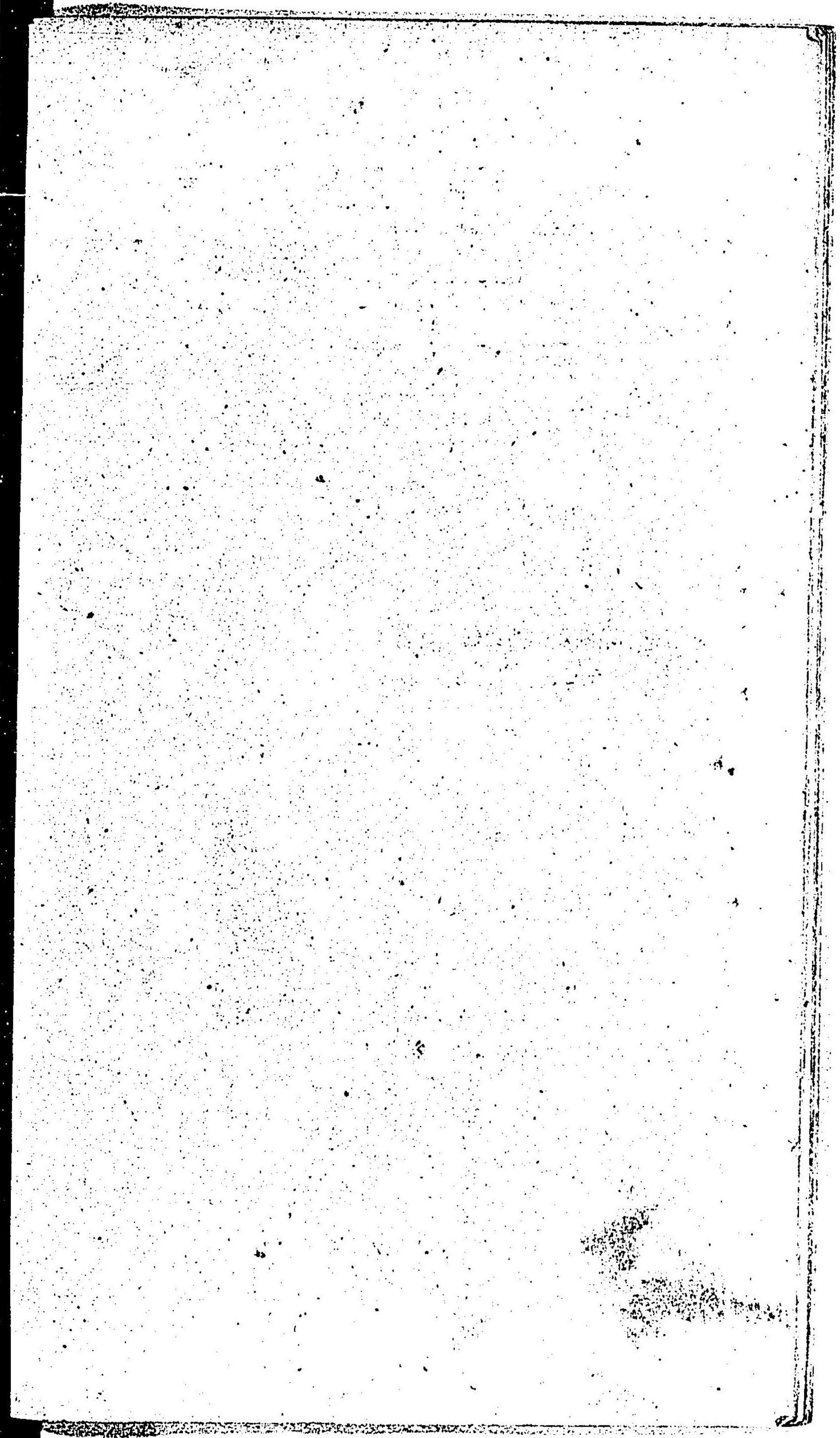
印刷者

大坂市南區盛町通三丁目三十五番屋敷  
山 田 元 吉

發行所

大坂心齋橋北詰八十六番邸  
駿 々 堂







駿大發行書目之內壹

紅葉山人著 歌川國松書

二一十圓

正價金三十錢  
郵税金八錢

每月一回定期刊行

還人物評論

定價金十二錢  
十部前金  
郵税金四錢

品田小葉著 石版密畫省像入

伊藤博文

定價金十二錢  
郵税金四錢

菊池幽芳著 稻野年恒畫

大探險

正價金三十錢  
郵税金八錢

霞亭主人著 田口年信畫

女書生

正價金廿五錢  
郵税金六錢

須藤南翠外史著 歌川國松書

當世息子

正價金三十錢  
郵税金六錢

健山人著 歌川國松書

新華族

正價金三十錢  
郵税金八錢

北村骸骨著

軒家

正價金二十錢  
郵税金四錢

江見水菴著 歌川國松書

不知親不知命

正價金三十錢  
郵税金六錢

乙羽庵主人著 歌川國松書

一人若衆

正價金三十錢  
郵税金六錢



貳內之目書行發堂友暇

每月一回定期刊行

**探偵又庫**

定價金二十錢  
郵税金六錢  
十部前金  
壹圓九十錢

島田小葉著 稻野年恒書

**羅夜及阿仙**

正價金三十錢  
郵税金六錢

島田柳川著 稻野年恒書

**監獄破**

正價金二十錢  
郵税金六錢

島田美翠著 鈴木錦泉書

**華族乃喪死**

正價金二十錢  
郵税金六錢

紅葉山人著 田口年信書

**女役者**

正價金三十錢  
郵税金八錢

紅葉山人著 中川蓋月書

**袖時雨**

正價金二十錢  
郵税金四錢

中村花瘦著 稻野年恒書

**小説一閃景**

正價金廿五錢  
郵税金六錢

紅葉山人著 竹内桂舟書

**南無阿彌陀佛**

正價金十二錢  
郵税金四錢

紅葉山人著 歌川國松書

**鳩乃浮巢**

正價金廿五錢  
郵税金六錢

紅葉山人著 稻野年恒書

**瀧京人形**

正價金二十錢  
郵税金四錢

三內之目書行發堂友暇

紅葉山人著 歌川國松書

**吟の小太郎**

正價金十五錢  
郵税金四錢

仙崎散史著 田口年信書

**高言**

正價金十五錢  
郵税金六錢

唯我下著 田口年信書

**火靈塚**

正價金十五錢  
郵税金六錢

松華庵人著 歌川國松書

**命井美人**

正價金十五錢  
郵税金六錢

泉枯川著 田口年信書

**破れ羽織**

正價金二十錢  
郵税金四錢

井上笠園著 稻野年恒書

**殺人罪**

正價金廿五錢  
郵税金六錢

松尾花土人著 田口年信書

**上等兵**

正價金廿五錢  
郵税金四錢

菊池勝芳著 歌川國松書

**春野若子**

正價金二十錢  
郵税金四錢

松尾山人著 筒井年信書

**忠奉行**

正價金二十錢  
郵税金四錢

石崎心月著 稻野年恒書

**花盗人**

正價金二十錢  
郵税金四錢



四内之目書行發堂友殿

神田伯龍口演 歌川國松書  
青原百人斬

正價金三十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 歌川國松書  
高倉百人斬後編

正價金三十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 歌川國松書  
休禪師

正價金二十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 田口年信書  
休禪師後編

正價金二十錢  
郵税金六錢

神田伯龍口演 歌川國松書  
錢屋五兵衛

正價金廿五錢  
郵税金六錢

石川一口口演 歌川國松書  
五大力

正價金二十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 田口年信書  
忠節お初

正價金二十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 田口年信書  
深晴小夜衣

正價金二十錢  
郵税金六錢

石川一口口演 歌川國松書  
曲垣平九郎

正價金二十錢  
郵税金六錢

神田伯龍口演 田口年信書  
守都宮釣天井

正價金二十錢  
郵税金六錢

五内之目書行發堂友殿

神田伯龍口演 田口年信書  
馬鹿三幅對

正價金二十錢  
郵税金六錢

松林伯龍口演 歌川國松書  
娘乃生靈聖

正價金三十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 酒井彌月書  
正宗孝子傳

正價金二十錢  
郵税金六錢

玉田玉芳齋口演 中川蘇月書  
水戸黃門巡遊記

正價金二十錢  
郵税金四錢

笑福亭松鶴口演 稻野年恒書  
木戸西園巡遊記

正價金二十錢  
郵税金六錢

玉田玉芳齋口演 稻野年恒書  
野狐三次

正價金廿五錢  
郵税金八錢

神田伯龍口演 田口年信書  
探偵金井圭次

正價金二十錢  
郵税金六錢

神田伯龍口演 歌川國松書  
八百蔵吉

正價金二十錢  
郵税金六錢

翁家三馬口演 田口年信書  
官員小僧

正價金二十錢  
郵税金六錢

松月堂香玉口演 田口年信書  
小倉騷動

正價金二十錢  
郵税金六錢



六內之目書行發堂友慶

六內之目書行發堂友慶

石川一口口演 田口年信書  
**幽靈小八**  
 正價金二十錢  
 郵税金六錢

松月堂玉口演 田口年信書  
**戶田慶次郎**  
 正價金二十錢  
 郵税金六錢

山崎翠子著 歌川國松書  
**小探偵血染之草鞋**  
 正價金廿五錢  
 郵税金六錢

松月堂玉口演 中川盛月書  
**肥後駒下駄**  
 正價金二十錢  
 郵税金六錢

巖城山人著 歌川國松書  
**賊紳士**  
 正價金二十錢  
 郵税金四錢

每月一回定期刊行  
**新百千鳥**  
 定價金十二錢  
 十二冊前金  
 一圓卅五錢  
 郵稅壹冊六錢

每月一回定期刊行  
**探偵小說**  
 定價金七錢  
 十冊前金  
 六十五錢  
 郵稅一冊四錢

浮世合上著  
**探偵薄皮美人**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

美翠子著  
**探偵鬼美人**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

島田美翠著  
**探偵生土劍**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

島田美翠著  
**探偵小將姫**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

孤舟漁隱作  
**探偵謀殺事件**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

浮世合上著  
**探偵福富千佐**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

島田小葉著  
**探偵稻妻**  
 正價金七錢  
 郵税金四錢

竹腰一朗著  
**尺八指南**  
 正價金十錢  
 郵税金二錢

大淵沙編輯  
**法令規則大全**  
 正價金三十錢  
 郵税金八錢

篠田正作著  
**軍事規則大全**  
 正價金三十錢  
 郵税金八錢

大淵沙著  
**日本萬箇農用文**  
 正價金二十錢  
 郵税金六錢

廣瀬芳一著  
**製法秘術活法**  
 正價金二十錢  
 郵税金六錢

竹内涉著  
**秘法奇術**  
 正價金二十錢  
 郵税金四錢



駿々堂發行書目之内

每集讀切雜誌

# 探偵小說

淀川の水淀み無く日夜流れ、昨日の淵は今日の瀬と、變る世の中に諸變らぬは、小説の趣向、男女の痴情に非ざれば惡漢毒婦の奸計邪策、様に依て胡盧を畫く千篇一律、其名こそ伊勢の濱萩と變れ、筋は變らぬ浪華の葦、其根を洗ひ葉を茹て、新たに芽を吐く一種向、他に類の無い探偵小説、奇想妙案神出鬼没、午睡の伽に旅行の伴、内外嫌はぬ重寶品、紙敷は毎も百頁以上、代價は僅か銅貨七枚、之を買ぬは損、之を讀ぬは痴

菊版 願美本  
壹册 定價金七錢  
郵送 税金貳錢  
郵十部 前金 金八拾五錢  
稅 共

第一集	薄皮美人	全一册	第十集	美人殺人	全一册
第二集	鬼美	全一册	第十一集	天刑木	全一册
第三集	かたき	全一册	第十二集	三筋の髮毛	全一册
第四集	生劍	全一册	第十三集	七人の慘殺	全一册
第五集	小將	全一册	第十四集	金の指環	全一册
第六集	暴殺事	全一册	第十五集	六人の死骸	全一册
第七集	福富中	全一册	第十六集	土藏切近江榮公	全一册
第八集	稻妻	全一册	第十七集	なま首	全一册
第九集	大蛇美人	全一册			

發行所

大坂南區心齋橋北詰

駿々堂



龜山 鳩の浮巢

實價廿五錢 郵稅六錢

内氣な令嬢が戀病、實意な仲居が  
心盡し、中にはさまる多情才子が、  
鳩の浮巢のそれならで、浮かぬ心  
の一徹より、さゝ波ならぬ大波を、  
立てんとせし京の間に、をさまる  
水や水蓮の、清きかけには折から  
の、唇さも何處へかさらりく



江見まほ著  
不知親不知命  
完 郵稅  
金六錢

新編 龜山人 女役者 實價三十錢 郵稅八錢

龜山人 吃小太郎 實價二十錢 郵稅四錢

櫻痴房 水野閣老 實價廿五錢 郵稅四錢

櫻痴房 水野閣老後之文 實價廿五錢 郵稅四錢



○**水戸黃門西國巡遊記** 實價六十錢 郵稅六錢  
 ○**官員小僧** 實價六十錢 郵稅六錢  
 ○**本町綱五郎** 實價六十錢 郵稅六錢  
 ○**傾城瀬川** 實價四十錢 郵稅四錢  
 ○**大道源左衛門** 實價四十錢 郵稅四錢



玉田玉芳齋口演 九山平次郎速記 中川廣月書 實價金貳十錢 郵稅四錢

○**俠骨日本男兒** 實價三十錢 郵稅四錢  
 ○**浪花大潮月** 實價二十錢 郵稅四錢  
 ○**忠臣文庫** 實價四十錢 郵稅四錢  
 ○**戸田慶次郎** 實價四十錢 郵稅四錢

新刊講談



石川一口口演  
**五大** 實價六十錢 郵稅六錢

神田伯龍口演  
**宇都宮釣天井** 實價六十錢 郵稅六錢

三遊亭花遊口演  
 吾妻貞女の仇討 實價廿錢 郵稅六錢

松月堂香玉口演  
**深情小夜衣** 實價廿錢 郵稅四錢

石川一口口演  
**幽靈小八** 實價廿錢 郵稅六錢

石川一口口演  
**雁金文七** 實價廿錢 郵稅六錢

行發堂々駿







肥後駒下駄

佛とは何を若間の苦むしる佛も下駄も同じ木の... 肥後駒下駄は關西にては駒下駄ともいふを以て...

廊文庫

本編に載せしむる話は花魁在原が情夫の豊松の爲... 廊文庫 實價十五錢 郵税四錢

小町娘噂の高岡

翁家さん馬丈が巧妙なる快舌に生れ丸山平次郎氏... 小町娘噂の高岡 實價十五錢 郵税四錢

失代譽之大久保

本書は府下講談家に有名なる玉田玉芳齋翁が得... 失代譽之大久保 實價十五錢 郵税四錢

今川春鷹大人編

八雲琴獨稽古

日録獨修法説明○一般の心得○琴の彈じ方の... 八雲琴獨稽古 全一冊特別減價十五錢 郵税二錢

女子手紙之文

大淵涉編輯

女子手紙之文 實價拾八錢 文郵税六錢

尺八指南

目録尺八吹様の傳○十二譜指法以并五調子の事... 尺八指南 全一冊特別減價十五錢 郵税二錢

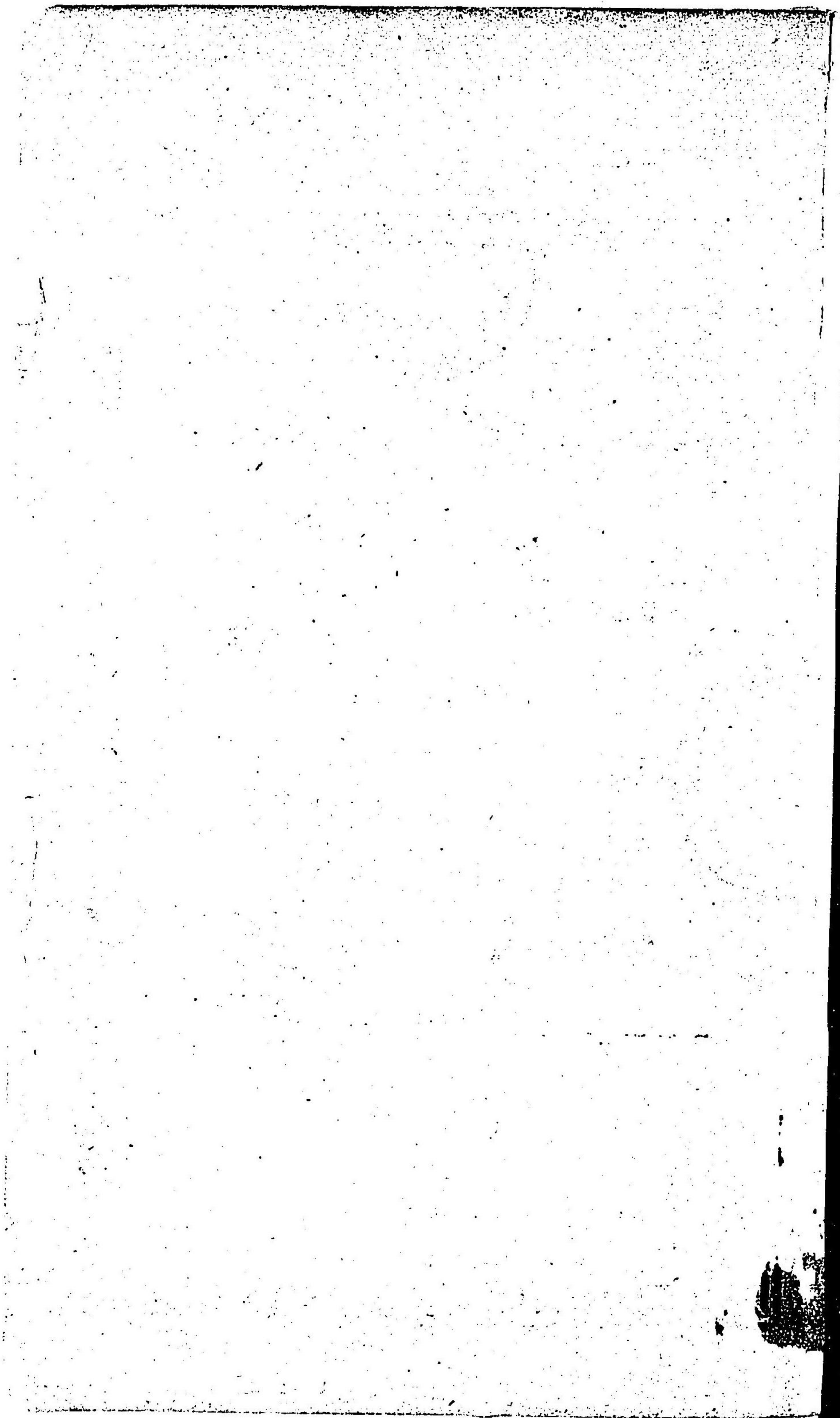
十二大家都名所十二景

第一嵐山春景 森 寶齋 第七 銀閣寺秋月景 森川曾文... 十二大家都名所十二景 全十二枚入り 實價三十錢 郵税二錢

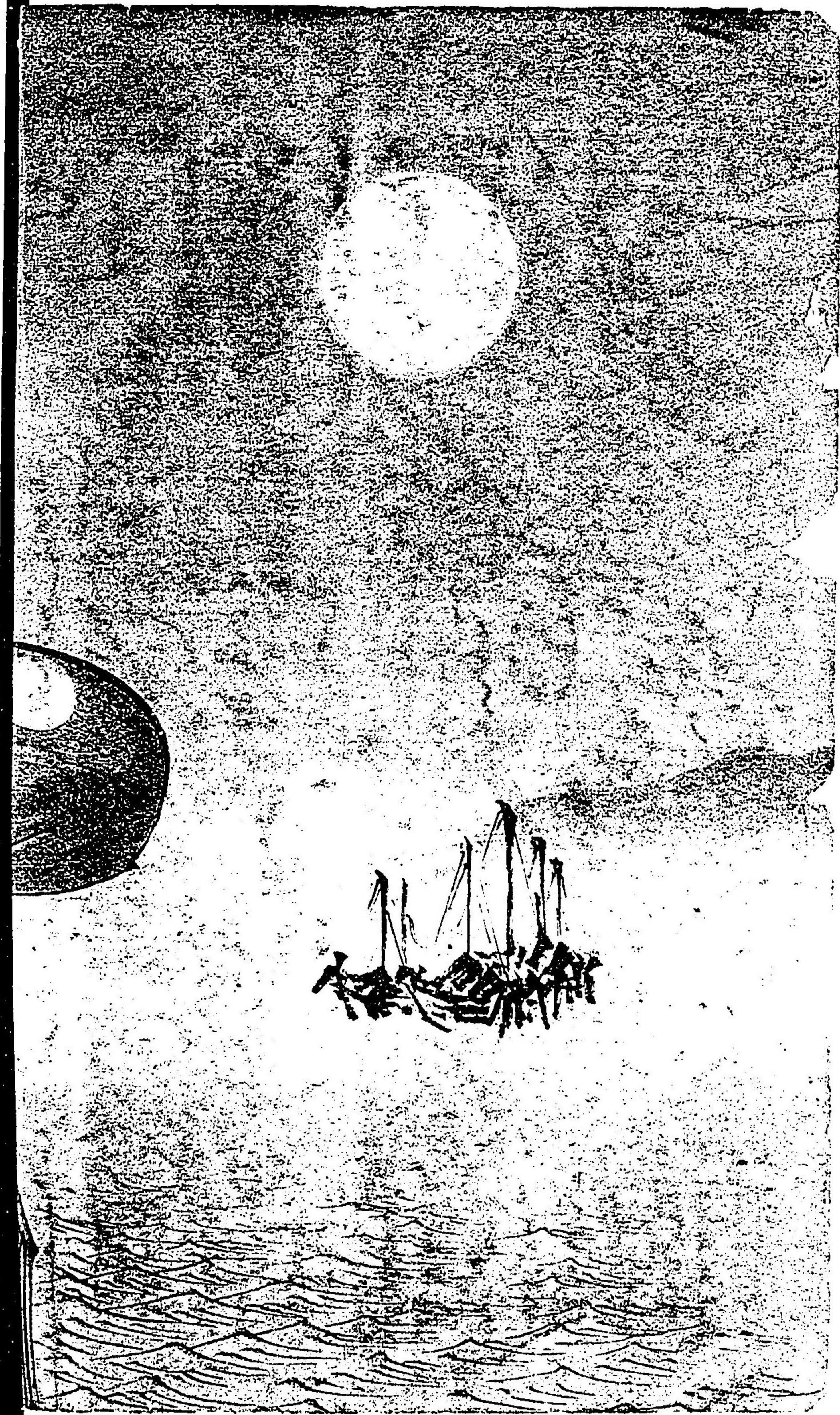




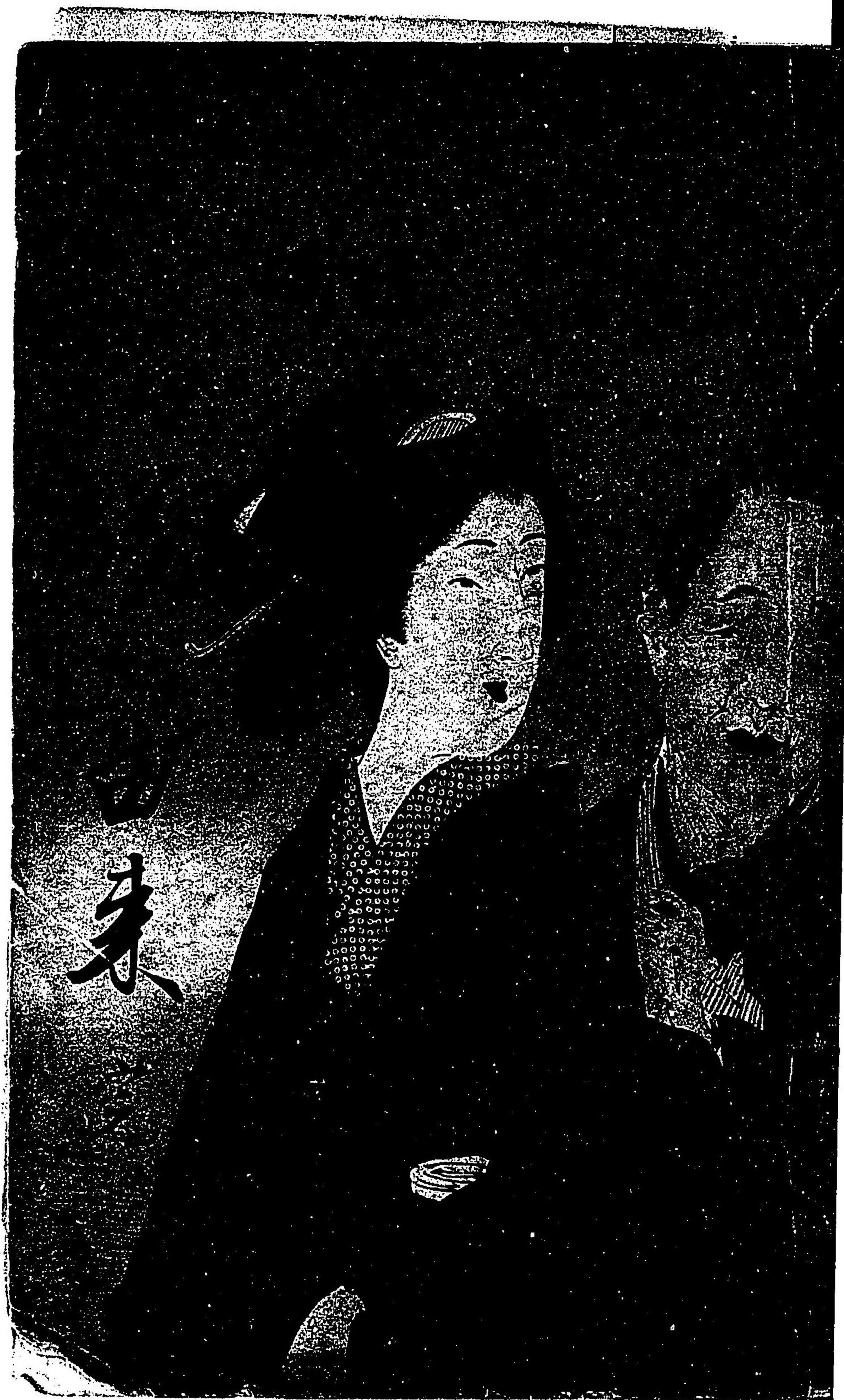












097491-000-2

特9-655

猫塚の由来(東金奇聞)

西尾 魯山/講演

M30

DBS-1401

